

---

# されど風車は虚しく回る

着地した鶏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

されど風車は虚しく回る

### 【Nコード】

N5628L

### 【作者名】

着地した鶏

### 【あらすじ】

大きな村の小さな小屋で先生と僕は暮らしている。先生は貧乏、だけど僕はなんやかんやで月花祭っていう祭りに参加することになっちゃった。でも変なお嬢様に絡まれるし変質者に遭遇しちゃうし何か大きいの出ちゃうし一体僕はどうなっちゃうのさ。思惑渦巻くポップでブラックなファンタジー。

## 第一話「先生と僕」

大きな村の外れ、その小さな小屋にその人は住んでいた。いや、居ついていたというほうが正しいのかもしれない。

「ロツシュ、どこにいるのですか？ ロツシュ」

さつきからその人は僕のことをずっと呼んでいる。

「いないのですか、ロツシュ？」

その人が来てから僕はその人の世話役をずっとやっているわけなのだけだ。

「ロツシュ、ロツシュ。ホントにいないんですか？」

十年前にその人が来てから身の回りの世話はみんな僕の仕事だ。来る日も来る日も料理、洗濯、料理、洗濯の繰り返し。

正直、退屈になるくらい単調な毎日だ。

「じゃあ、この猫はロツシュのベッドにでも置いておきましょうか」

「ワア　　！やめてよ先生！　僕が猫アレルギーだって知ってるでしょー！」

「おや、いたのですか」

先生と呼ばれたその人は三毛猫を抱えて僕の方に歩み寄ってくる。

「うげっ、せつ先生それ以上近づかないで！　ジンマシンが」

「おっとすいません。うつかりしました」

うつかりなもんか、絶対わざとだ。

先生は三毛猫を窓から放り出して、『猫が入ってきたんでどうしようかと思ったんですよ』と白々しく答えた。

「大体、猫が入ってきたぐらいでいち僕を呼ばないですよ」

「失敬な。そんなことのためにロツシュを呼ぶわけじゃないじゃないですか」

先生はムツとした表情で僕を睨んだ。

そして真剣な顔で僕にこう言った。

「お腹が空いたのです」

この先生との生活ももう十年近くになるしこんなことは日常茶飯事だ。

だけど僕は召使いロボットでもなければ従順な犬でもない。

この今の生活に耐えられないくらいの嫌気が差すのは自然なことだろうか？

それに僕は体の不自由な先生のお手伝いさんという名目でここに  
いるわけなのだけれど。

目の前の先生はどこをどう見ても不自由そうには見えない。

むしろ自由そのものだ。

だから今日という今日は先生に従うわけにはない。

少し反抗を見せるべきではないかと思う。

「先生は偉い先生なんだから自分のご飯ぐらい自分で作ったらどうなの？」

僕はキツと先生を睨み返してフライパンを先生につきつける。

さあ、どうでる？ 先生。

「偉いからこそ食事は他人に任せるといふ見方もできますが、そもそも今の私は料理は作れません」

窓の外の猫に向けていた顔を僕の方に戻して先生は続ける。

「私は眼が見えないんですから」

## 第二話「旦那とお薬」

十年前、一人の旅人が村の前で生き倒れになっていた。

冒険者であることはその身なりからすぐに分かったらしいけど、その鎧や兜の痛みが尋常でなかったから村人たちはその人を「伝説の勇者」と思い込んで手厚く看病したそうだ。

その看病のおかげかどうかは分からないけど、三日後にその旅人はようやく意識を取り戻した。

「で、その旅人が私だったというわけですね」

先生はそう言うとお食べ終わったスープ皿をコツコツと二回叩いた。おかわりがほしい、の合図だ。

「で、先生はこの村に来た時から目が見えなかったわけ？」

鳥と野菜のスープを皿に並々と注いで僕は尋ねた。

「そうですね、ロツシユ。目が見えない私のために町長さん、つまりあなたのお爺様がこの家をくれたんです」

お爺様。その言葉を聞くと気分が悪くなる。

僕をこんな村外れに追いやったのはお爺様だ。

それが村のためだとお爺様は言ったけど、僕にはそれがどうしても納得いかない。

やっぱりあの噂は本当なのだろうか。

「そういえば、最近風車の音がやけに五月蠅いんですが」

「ああ、二、三日前から調子が悪いみたいで。村の人たちの話じゃ隣の腕のいい左官屋さんを呼んでくるって言ってたけど、しばらくはあのままみたい」

「じゃあ、当分の間あの機械音に私の睡眠は邪魔され続けるのですか」

「……ちゃんと仕事しなよ」

お爺様の名前を聞いて僕が気分を悪くしたのを感じ、先生は話を当たり障りのない話題に変えた。

これは不器用な先生なりの優しさなんだと思う。

「おい、キーフェ先生はいるかい」

「やあ、ロストフさん。私はこっちにいますよ」

食事を終わるとちょうどいいタイミングで建具屋の旦那が訪ねてきた。

旦那は先生の座っている椅子のそばまで寄って先生に話しかける。

「今日はどうしたんですか。また腰の薬ですか」

「いやあ、ちよつと女房の奴がね風邪こじらせちまつたみたいで」

「ああ、それならこれとこれがいいかな」

先生は棚の薬瓶、薬箱を嗅ぎ分けて粉末が入った小袋と液体の入った小瓶を選び出した。

「これを匙に二杯ずつ朝晩飲ませてあげれば三日もすれば元気になりますよ」

「おお、ありがとう先生。お代はいくらだい」

「今日の分はいいですよ。それよりその机と棚の調子が悪いんで直しといてくれませんか」

「おう、任せとけ。明日までにはピカピカにして届けるよ」

「お願いします」

目の見えない先生はなんでも旅人時代の経験を生かして薬を作って売っている。

と言ってもお金なんて貰わないことが多くて、今日みたいに家具を直してもらったり肉や野菜をもらったりして生計を立てている。

週末には子供たちに勉強を教えるみたいだし村の人からの信頼も厚い。

「先生」と呼ばれるのは伊達ではないのだ。

台所を片づけていた僕は帰ろうとしていたロストフの旦那にちょっと出くわした。

「おお、ロツシュか。前会ったときからちつとも大きくなってないな」

「旦那と会ったのは一週間前ですよ。それからすぐに大きくなるわけじゃないじゃないか」

「がははは、冗談だよ、冗談。でも子供は成長が速いからな、一週間でも結構成長するもんだぞ」

余計な旦那のひと言に僕はふくれてみせる。

旦那は悪気のない笑いで僕に謝る。

「ところでロツシュ、お前今年14だろ。今年の月花祭には出るんだろ？」

「あ、あー、つ、月花祭ね。うん、まあ考えとくよ」

「そうか。ウチのカミさんお前が出るの楽しみにしてたぞー」

旦那はそう言うところの小さな小屋を後にして家路についた。

旦那が去って、僕はひとり台所で悩んでいた。

「月花祭か……」

「出ればいいじゃないですか」

「うわあ、先生。いたの!？」

先生がふいに後ろから現れたから僕は驚きで心臓が止まるかと思っただ。

「そんなに驚かなくてもいいのに……」

「ご、ごめん先生。でも僕、月花祭には出ないよ」

「出ればいいのに。私のことなんか遠慮しないでいいですよ、その日はロストフさんが誰かに付き添ってもらいますから」

「いや、そうじゃなくてさ……。月花祭の衣裳ってさ、ほら……恥ずかしいじゃん？」

「ああ、あのフリフリしたやつですか」

「そうソレ、ソレ」

「でも……」

次の瞬間、先生はやけにニヤついた声で攻撃力抜群の台詞を吐いた。

「でも女の子なんだからいいじゃないですか、ロツシユお嬢さん」



### 第三話「僕と疑惑」

月花祭、私たちの村の祭りのひとつで一年で一番華やかな一夜だ。14歳になった少女が綺麗な衣裳に身を包み、花の精のように月夜の下で踊るのだ。

「僕が出たってつまらないよ、背も小さいし美人でもないし」

「それに普段は男の子と見間違っただすもんね。『僕』なんて言ったり、髪も短かったりするから市場に行くとしょっちゅう男の子に間違われますもんね」

「な、なんでそんなことまでわかるのさ！先生は目が見えないんでしょ」

僕は先生に殴りかかる。けど、先生はそれを華麗にかわした。

「いやあ、さっきロストフさんが楽しそうに話してましたから、ハハハ」

「旦那…、今度会ったら……」

僕が怒りで顔を赤くしていると先生は何も言わず奥の部屋に入ってしまった。

話は脱線し、これで月花祭の話も流れたかと思うと少し安心した。先生も少しは僕の気持がわかるようになったようだ。

「あ、そうそうロツシユの衣裳はロストフさんの奥さんが仕立ててくれるらしいですよ。フリッツリのカワイイのを」

前言撤回。やっぱり先生は僕のことなんて何一つわかつちやいな

むしろ僕が悩んでいる状況を楽しんでいるようだ。

「このバカ野郎ー!!」

僕はそこら辺にある鍋やらフライパンやらを先生に投げつけてここから飛び出した。

「夕食までには帰ってきて下さいよー」

「うっさい馬鹿野郎!」

最後までマイペースな先生に毒を吐きながら私は小さな小屋から離れていく。

気が付いたら村外れの大きなもみ樅の木のところまで来てしまっていた。

ここは人通りもなく、静かで涼しい樅の木の下で僕は走り疲れた体を休めることにした。

柔らかい草の上に寝転び僕は月花祭のことに思いを馳せる。

本当のことを言えば僕も女の子なんだから月花祭にはもちろん出たい。

だけどどうしても出れない理由があるのだ。

先生がそのことを知っているかどうかは分からない。

でもいくら先生の目が見えないといっても先生と僕が大半の村人たちからどう思われているか知らないわけではないだろう。

だけどそのことを先生に伝える勇気は僕にはない。

村人からの信頼の厚い先生、だけど村人の全てがみんなそうだと

いうわけではない。

先生を訪ねてくれる人たちは優しい人ばかりだ、みんな親切にしてくれる。

でも、心の底ではどう思っているか…。

「あー、もうやめた！」

大切な人たちを疑うのはよそう。

そして僕が月花祭に出なければなにも問題はないんだから。奥さんには申し訳ないけど。

周りを見ると夕日で紅く染まっていた。

もうこんな時間か、早く帰って夕食を作らなきゃ。

僕は来た道を急いで戻る。

先生はきつとお腹を空かせて不機嫌にしてるだろうな。

#### 第四話「俺とお嬢様」

ここは村の中心部にある酒場。

善者も悪者も酒を飲み、富める者も貧しき者も、村の人も外の人も多くの人が集まる酒場。

「なんだと、あの変人のとこの小娘が月花祭に!？」

「ああ、さつき建具屋が楽しそうに言ってたよ」

隣に座った友人の話を聞きながら、俺はグラスの液体を飲みほして新たに褐色の液体を注いだ。

村外れの変人、その世話係の娘が月花祭に出るって言うんだ、友人の話はそんな感じだった。

普通ならあの娘の話が出るだけで酒が不味くなるのだが、今回この話は酒の肴としては最高だった。

「ふははは、あの貧乏人どもがそんなことをねえ」

「まったくだ」

笑いながら友人も新しいボトルを開ける。

あの娘が月花祭に出ると聞いたとき、俺は自分の耳を疑った。

貧民の娘が月花祭に出るなんて聞いたことがないからだ。

月花祭、それはこの村で一番華やかな祭であると同時に一番金のかかる祭りなのだ。

14歳になった村娘たちが伝説の月姫、花姫に扮して夜通し踊るというものだが、この祭りの主催費のほとんどは踊子たちの家が負担する。つまり祭が華やかであればあるほど金もかかるわけだ。

その上、今や月花祭は村の富豪たちが互いの権威を賭ける場と化し、互いに競い合うように金をばら撒くので祭はこの上なく華やかでこの上なく高級なものになってしまっている。

もつとも踊子は自由参加なので普通は金の無い貧乏人が踊子になること自体不可能なのだが。

「いったい、あの貧乏人どもどこにそんな金があるのやら」

「さあね、あの小汚い小屋を売り払ったとしてもたかが知れてるさ」

「どのみちそんな噂は実現しないな、不可能だ」

「ははは、その通りだ」

俺たちはまた笑いあって酒の入ったグラスを空にした。

「あら、何かおかしいことでもあったのかしら、村会議員さま」

楽しそうに談笑していると後ろから若い女の声が聞こえてきた。

振り向けばそこには確かに若い女、いや少女が立っている。

「これは、これはサナお嬢様。こんな夜更けにこんなところに来てはいけませんぞ」

「お子様扱いしないで頂戴。それに今日は良いの、お父様の付き添いなんだから」

俺が綺麗な洋服に身を包んだお嬢様をからかうと、彼女は怒ったように頬を膨らませ、その顔のまま向こうの方を指差す。

指差された先には恰幅の良い上品な中年男性がいて数人の客と談笑していた。

酔いのせいではつきりとはわからないが、どうやらその男はこの村の大富豪、宝石商のロレンソ氏のようにだった。

「おや、これは村会議員のハイネ君じゃないか」

ロレンソ氏は俺に気づき、俺の名を呼びながら俺の方のにやってくる。

彼が歩くたびにその風船のような腹が左右に揺れる。

もう秋だというのに額は汗でテカっており、彼の首飾りの光る宝石と見間違えるほどの輝きを放っていた。

「お久しぶりです、ロレンソ殿」

「奇遇だなあ、半年前の定例会以来かね。すまないな、職業柄村にいないことが多いがね」

「宝石商はお忙しいでしょうからね。ところで今日はどうしたんですか、お嬢さんまで連れて」

「そうそう、今日来たのは娘のことなんだよ」

そう言うとロレンソ氏は宝石飾りのジャラジャラついた胸を張って咳払いをしながら辺りをぐるりと見渡した。

それから店全体に聞こえるようによく響く声で叫んだ。

「皆聞いてくれ、私のかわいいかわいい愛娘ドルサナが今日14歳の誕生日を迎えた！もちろん今度の月花祭にも出るぞ。今日は祝いだ、酒は全部私の驕りだから皆ジャンジャン飲んでくれ！」

お嬢様の誕生日を祝っているのか、それとも最後の一言が効いたのか店のあちこちから高らかな歓声が上がった。

そしてロレンソ氏は俺に一礼をすると酒を持って歓声の中に紛れて行った。

要するに、ロレンソ氏は娘自慢をするためだけに人の一番集まるこの酒場まで足を運んだというわけか。その上酒まで振る舞うとは。

親バカとはここまで酷いものなのか、と頭を抱えながら独身者の俺はグラスの酒を一気に流し入れた。

「それにしても、14歳だったのか、お嬢様」

「何よ、もつと子供だと思ってたのかしら」

「いや、その逆だ」

俺がそう答えると、お嬢様は首を傾げた。

黒いゴシックなドレスに身を包んだ少女がその蒼い瞳を俺に向けている。

恰好が大人びているせいもあるがとても14歳の少女には見えな  
い。

背も高く、あと、あれだ女の子としての発育もとてもよろしいの  
で18歳の乙女と言っても十分通用するんじゃないだろうか。

「何なのよ」

「いや、別に」

自分の胸元を凝視する視線に気づいたのか、お嬢様は胸を隠すポ  
ーズをして俺を睨みつける。

いやはや、俺ももうすぐで30だというのにこんな小娘に平常心  
かき乱されてしまうとは、どうやら相当酔いが回ってるらしい。そ  
うだ、酔いが回ってるせいなのだ。

「ところで、さっき何か面白いことでもあったのかしら。二人で随  
分と楽しく笑っていたから」

「ああ、それはだな」

正直、お嬢様への対応も面倒臭くなってきたので俺は友人に全て

を丸投げするべく後ろに振り向いた。

だが、そこに友人の姿は無かった。

辺りを見渡してみると友人はいとも簡単に見つかったが、彼は椅子の下で大きないびきをかきながら眠っていた。彼の周りには高そうなウイスキーの瓶が何本も転がっている。

「タダ酒だからって飲みすぎだろ」

そう言っただけで友人を軽く蹴飛ばしてみる。だが彼は依然として眠り続けている。

これは駄目だ。

「ねえ、聞いてますか」

「あ、ああ、うん、聞いてない」

お嬢様は俺の適当な対応に腹を立てたらしく、次の瞬間彼女のヒールの高い靴が俺の左足の脛に直撃した。

「んぐツ！！！」

「どうです？これで少しは酔いも醒めたでしょう」

「わ、わかったよ、話すからその手に持った椅子を降ろしてくれ」

お嬢様は俺の左足に激痛を与えておきながら、それに追い打ちをかけるようにそこらの椅子を抱え上げて大きく振りかぶっていた。

金持ちのわがまま娘と言うものは本当に手に負えないことを俺は痛感していた。

「なんでも村はずれの小屋の娘が月花祭に出るらしいぜ」

「村外れの？あのロッシユとかいう女の子のこと？」

「ああ、その通りだ。まあ、あんな貧乏人にそんなことは実現させられないと思うがな」

「そつとも言えないんじゃないかしら？」

お嬢様は不敵な笑みで俺を見つめる。美人の部類に入るその顔からは何とも言えないドス黒いものが感じ取られる。

「どういう意味だ、それは」

「どういう意味って、それはあなたが一番わかってるんじゃない？」

お嬢様の蒼い瞳が冷たい輝きを放ち、プスプスと俺に突き刺さっていく。

「あのロツシュっていう子？今は随分な生活をしてるようだけど、家柄は決して卑しいものじゃないじゃない。むしろかなりの上流階級よ」

「言いたいことは分かった。だがそれ以上は言うな、酒が不味くなる」

「いいじゃない、可愛い姪っ子のためにお金を出すくらい」

「五月蠅い！ あいつと俺とはもう何の関係も無い」

俺はグラスを握った手をテーブルに叩きつけた。店内の喧騒にかき消されて、誰もこちらには気づいていない。

だが、俺は怒っていた。小娘に古傷をえぐられたように胃の奥がジクジクと痛んだ。

「ふーん、随分荒れてるようね。じゃあ、私はこれで失礼するわ」

お嬢様は冷酷に笑って父親の方に歩いて行った。

酒で顔を紅潮させたロレンソ氏は皆に挨拶をして酒場を去って行った。

店内の喧騒はもうしばらく続きそうだ。

「若い子は知らないんだろ？な、あの娘がどうしてあんな辺鄙なところに追いやられてるかを」

「お前、酔いつぶれて寝てたんじゃないのか」

俺の隣にはさっきまで床で寝ていた友人がガッツポーズを見せて座っていた。

なるほど、さっきまでのは狸寝入りだったというわけか。

「まあ、俺が狸寝入りだったかそうじゃなかったとかは別にいいじゃないか」

「何も言っていないのにぺらぺらと喋るってことはちゃんと狸寝入りの自覚があるんだな」

「え、あ、それは…」

とりあえず一発殴っておいた。それでも友人は椅子からずり落ちないように耐えてみせた。

「話を戻すがあの娘があの変人のところに置かれてる理由って何だと思う？」

「はあ？お前はあの14年前の惨劇を忘れたのか！？」

「いや、そう怒るなよ。あんな事件を忘れられるわけがない、お前は特にな」

「とにかくあの娘はあの惨劇の原因だ。だからあの変人に押し付けただ、それだけだ」

「…ふむ、お前の親父さん、村長はそんな理由で孫娘を手放すかね」「何だと、貴様！！」

俺は友人に掴みかかった。こいつはいくらなんでも無神経すぎる。14年前のあの惨劇は間違いなくあの娘が生み出した。血に塗られ俺の心に深い傷を残したあの惨劇はあの娘のせいだ。親父も二度目の惨劇を恐れてあの盲目の変人と一緒に村の外れに追いやった。

友人の襟元を掴みながら俺は泣いていた。  
俺は手を離れた。友人は座るようにして椅子の上に尻もちをついた。

「もういい。今日は酔いのせいにしてやるが次は無いと思え」

「すまん言いすぎた」

「ふん、お前らが何と言おうと俺があのお呪われた娘に援助するなんてことはないぜ」

「別にそんなつもりで言ったんじゃないんだがな。まあ、呪われた娘ね、たしかにその通りだ」

「お前のせいで酔いが醒めた、飲み直そう」

「はいはい」

俺たちは再びグラスに酒を注ぎ、夜の闇が黒くなっていくのを静かに眺めながらひたすら飲み続けた。

## 第五話「お嬢様と僕」

「御機嫌よう、あなたがロツシユさんかしら？」  
「うわわっ」

後ろから突然話しかけられたので僕は驚いて玉葱の入った籠を落としてしまった。

後ろを向くと日傘を差して少々派手なゴスロリファッションに身を包んだ女の子が立っていた。“お嬢様”という言葉が似合いすぎるほどのお嬢様だった。

さて、こんな良家のお嬢様のような人が僕になんの用だろうか。確かに時たまだけど大富豪のような人が先生の薬を買いに来ることはある。だけど、今この人は先生の名前ではなく僕の名前を呼んだのだ。僕はこの人を知らない、今日が初対面だ。だというのにあちらは僕の名前を知っている。

「あおう、どちら様で？」

「質問に質問で返すのはよろしくなくてよ。まあいいわ、私はドルサナ・ロレンソですわ。で、あなたがロツシユさん？」

「ええ、ロツシユは僕ですが」

「ふーん、あなたがねえ」

ドルサナさんはそう言いながらまるで品定めでもするように僕を上から下までジロジロと見ていた。

綺麗な服装のドルサナさんとは対照的に僕は随分と貧相な恰好をしていた。ギラギラと日差しが照りつける中、庭の畑の手入れをしてきたものだから服は泥だらけ、顔にも土汚れがついている上、体は汗と砂埃でぐちゃぐちゃだった。今の僕は何もドルサナさんと比べなくても一発でアウトだろう。

「はあ、それでそのロレンソさんが僕に何の用ですか」

「そうね何から話せばいいのかしら。あ、そうそう、あなた月花祭に出るんでしょう？」

月花祭、そう聞いて僕は一瞬硬直した。どうして最近僕の周りにはこうも月花祭の話ばかり湧いてくるのだろう。それにまだ一言も出るなんて言っていないのに。心当たりがあるとすれば建具屋の旦那だ。どうせ旦那が誰彼構わず言いふらしているに違いない。まったく、一々訂正して回らなきゃいけないのは僕なのに。

「あのですね、僕は月花祭には……」

「でもね、ロツシユさん私、今日はあなたに忠告があつて来たんですの」

「へ？」

ああ、なんでかなあ。僕の周りの人たちってなんで他人の話を聞かない人ばかりなんだろう。先生も旦那も僕を完璧に無視して話を進めようとする。そしてこのドルサナさんも例外ではない。ドルサナさんは随分と高飛車な物言いで僕に絡んでくる。何なのさ、その勝ち誇つたような目は。僕は内心このドルサナ嬢に対して苛立ちを感じていた。

「忠告つて何ですか」

「月花祭、辞退したらいかがかしら？」

「は？」

「あなたも知ってるでしょうけど、月花祭は出場するだけでも凄いお金がかかるんですよ。いくらかご存じかしら？そうね、去年は踊子一人当たり360万ペセタだったらしいですわ。まあ、この薄汚い小屋ならあと50軒は買える額ですわね」

ドルサナ嬢は文字通り汚いものを見る目で僕らの家を見た。

「薄汚い小屋あ？」

「あら、失礼しましたわ。そう言えばここに住んでるんですけどっけ」  
「大体ねえ、僕は月花祭に出るつもりなんか……」

「何でもあなたのお爺様、村長様のいる村議会の方も援助するつもりはないとか」

「な、お爺様は関係ない！」

「ふふ、でも心配なさらなくてもいいのよ。私にいい案がありますわ」

「へ？」

ドルサナ嬢は不敵な笑みを浮かべた。冷酷な笑みだ。彼女を花にととえるなら可憐な薔薇だろう。血の色をした真つ赤な薔薇を僕は連想した。この人の提案には決して僕に対する好意などなく、ただ僕を茨に絡めてしまおうという黒い悪意しかないことははっきりとしていた。

「私のお父様はロレンソ商会の会長なの。私がお願いすれば300万ペセタでも3000万ペセタでも出してくれますわ」

「つまり、あなたは僕に貸しを作ろうと」

「ええ。でもいいのよ、お金は返さなくても。ロレンソ商会の慈善事業としてお父様の株も上がることですし。どうかしら、悪い話じゃないはずですわ」

「話がうますぎるよ。それにそんなことをしたって何のメリットがあるのさ」

「ふふ、鋭いですわね。そう、一つ条件があります」

「条件？」

「あなた、私の召使になりなさい」

ドルサナ嬢のその蒼い瞳は輝きを増し、頭に付けた真っ赤な薔薇飾りのようにその白い頬を紅く上気させた。冷酷な血の薔薇の化身のような彼女は笑うのを止めない。幼い無邪気さを秘めた彼女の言葉からは幼いゆえに強固な意志を感じた。

「あなたは一生私の召使として生きるの。村長の血を継いだ高貴なあなたが私に一生頭が上がらないなんてこんなに愉快なことはないでしょう?」

「ツク、最低だな、あなたは」

「何とでもお言いになって。でも、どちらの道を取ってもあなたの負けよ。もし提案を呑まなければあなたは月花祭には出られないし、踊り場で踊る綺麗な私を屈辱感に浸りながら見るしかできないのよ。貧乏人は大人しく私たちに尻尾を振ればいいんですよ」

「こ、このツ」

僕は頭に血が上り、右手を思いっきり振り上げた。彼女を打とうとした。これから先、どうなるかなんて考えもしなかった。ただこの目の前の僕の怒りをどうにかしないことには気持ち収まりそうになかった。だから、僕は右手にこれまでにないくらいの怒りを込めて思いっきり振り下ろした。

だけど彼女の頬を打つ音は聞こえてこなかった。それもそのはず、僕の右手は後ろから誰かに握られていたからだ。

「せ、先生」

「ただいま、ロツシュ。とりあえず涙を拭いてください」

先生はそう言うのと左手で僕の目元を拭ってくれた。気がつかないうちに僕は泣いていたのだ。

「あら、あなたがキーフェ先生ね。初めまして、私はドルサナ・ロレンソ。今日はロツシュさんにお願いがあって来ましたの」

「ええ、話は少しですが聞かせてもらいました。随分とお金がかかるんですね、月花祭は」

「はい。ですからロレンソ商會が援助の手を差し伸べに来たんです」

ドルサナ嬢は先生の登場にも何の動揺もしてないらしく全く顔色を変えていない。僕に話したのと同じように淡々と話し始めた。

先生は腰につけていた重そうな袋を手にして中身を地面に捲いた。袋の中からはジャラジャラと大きな金貨が流れ出てきた。足元には金色に光る金貨の山が出来た。

「どうですかね、大体700万ペセタくらいはあると思うんですが。これじゃあ月花祭には出れませんかね」

「な、何で」

「せ、先生、そんなお金どうしたの！」

「薬屋をナめないで下さい。お金を持つてる人からはたくさん貰ってるんですからね」

そんなにお金があったのに僕は貧乏生活を強いられていたのかと思うと先生に少し腹が立った。だけど今はそんなこと言ってる場合じゃない。ドルサナ嬢の方を見ると憎々しい顔でギリギリと歯ぎしりをしていた。

「まあ、そう言うことなんでロレンソ商會の援助なんていららないんですが。それでもまだ何か？」

「何で、何でこんな貧乏人が私に楯突くんのですの！ 屈辱ですわ」

「……」

「貧乏人はこの美しい私にひざまずいてれば良いんですわ。この小汚い小娘が何で……」

次の瞬間、頬を打つ乾いた音が響いた。ドルサナ嬢の左頬は赤く熱を持っていた。打つたのは僕じゃない。先生の右手が正確に彼女の頬を捉えたのだった。

「何するんですの、この盲目！顔を打つなんて、私の美しい顔を」  
「ええ、盲目で結構。目が見えませんがね、あなたが美しいのなんだのはわからないんです。ですけどね、あなたは美しくない」  
「わ、わけがわかりませんわ。そんなの盲人の戯れ言じゃない」  
「見えない方がかえってよく見えるんですよ。あなたは血で濁ったようにくすんで見える」

「お黙りなさい！ いいこと、私に対して無礼な真似をとっておいてお父様も黙ってはいないわよ」

そう言うのとドルサナ嬢は走るようにして去っていった。

先生は後ろから私をギュッと抱きしめた。先生の温もりが伝わってくる。

「先生」

「何ですか」

「ありがとうございます」

「いいですよ、私は私のしたいようにしただけですから」

先生は涼風のように涼しげな微笑みをみせた。

「先生、僕出るよ。月花祭に出るよ」

「どうしたんですか。この前までは出ないって言ってたのに」

「あのお嬢様にあんなに言われたらもう後には引けないよ。月花祭に出て見返してやらなきゃ気が済まない」

「ははは、ロッシユらしいですね」

僕はお嬢様に何も言い返すことが出来なかった。それどころか先

生に助けられた。僕は自分の無力さを悔んだ。所詮自分は弱々しい一人の村娘に過ぎなかったのだ。

だからこそ、僕は強くならなはいけないなだ。今度は僕の力でドルサナ嬢に勝たなきやいけないなだ。

さあ、反撃の始まりだ。



決まった。僕の拳は完璧にクソガキの顎に入った。完璧、素晴らし。  
レシト  
しい。

「僕は女の子だ！ バカなこと言っていないでさっさと先生のところに戻って勉強しな」

僕は気絶して動かないクソガキを叩き起こして向こうの部屋に追いやった。

するとクソガキと入れ替わるようにして履物屋の娘っ子が向こうの部屋からやって来た。そして娘っ子は僕を見るなり目を輝かせて歓喜の声を上げるのだ。

「わー、ロツシユ可愛いー。お人形さんみたいー」

「ええ、そうかな？」

「可愛いよー、まるで女の子みたいー」

僕の額では青筋がビキビキと音を立てていた。

うん、もちろんこの娘っ子には悪気はないはず。ただ悪気と一緒にデリカシーも無くしているだけだよ……。可愛いと誉めてくれたのは嬉しいんだけど、素直に喜べない。フクザツな感じだ。

「そ、そんなことより勉強は？ サボってるよ先生に叱られるよ」

「今は休憩なんだってー」

「ああ、そうなんだ。じゃあおやつでも持って行くこうか」

「わーい、おやつ、おやつ」

僕はスカートを脱いでいつもの服に着替えると、オープンから取り出したマフィンを皿に盛って、娘っ子と一緒に先生の部屋まで持って行った。娘っ子が嬉しそうにはしゃいでいる姿は気持ちを和ませてくれる。さっきの青筋ビキビキなんてのはもうどこかに行ってしまったようだ。

部屋では椅子に腰掛けている先生の周りで十数人の子供たちがワイワイ騒いでいる。

今日は一週間で一番賑やかな日。先生が村の子供たちに勉強を教

える『勉強会』の日だからだ。

村にはお金持ちが行く学校が一つあるだけなので、こうして職人さんや農家の子供たちは先生に勉強を教わりに来る。先生は算術や数学、歴史や自然科学を教えている。その他、諸々の雑学、滑稽話を織り交ぜて話し、子供たちはいつも熱心に耳を傾ける。

ただ、今は休憩時間ということで、床に寝ころぶ子供、ノートの落書きを見せ合う子供、先生に色々と質問を投げかける子供、など様々だ。まあ、所詮お子ちゃまの集中力なんてこんなもんだよ。

「あー、ロツシユお兄ちゃん」

「ロツシユお姉さん、だろ。どうしたのさ」

「これ何て読むのー」

「ああ、これはね“かえる”って読むんだよ」

「そっか“カエル”かー。ありがとう、お兄ちゃん」

「お、ね、え、さ、ん！」

先生は目が見えないから文字の読み書きを教えるのは僕の仕事だ。正直なところ、まともに字を習ったことはないから僕が読める字とこのもたかが知れてるんだけど。

「せんせー、先生は村に来る前は世界中を旅してたんでしょ」

「そうですね、色んなところをグルグルとね。世界は広いですよ、みんなが見たことない生き物なんてごろごろといますからね」

好奇心に溢れた子供たちの目はキラキラと輝いていた。未知の世界の扉を開きたくてうずうずしているのがよくわかる。

「聞かせてよ、旅のことを」

「きかせて、きかせてー」

先生の周りに集まっていた子供たちがそんなことを言い出す。好奇心を押さえられない年頃なんだろう。気がつけば部屋にいた子供たちがみんな先生の周りに集まって先生に昔話をせがんでいた。

「わ、わかりました。話すから、みんな落ち着いて下さい」

子供たちの熱意に負けたのか先生は渋々了承する。正直、普段から昔のことは一切語ろうとしない先生が自分の過去を語るなんて驚きだ。先生の過去には僕も興味津津で、お盆を抱えたまま僕は子供たちに混じって先生の話に耳を傾ける。

「なにから話したらいいんでしょうかね」

「なんでもいいから早く、はやく」

「じゃあ、南の国の怪鳥の話でもしましょうか。この村から南にずーっと行ったところに砂漠の泉街という商人の街があるんですけどね……」

先生の話が始まるとさつきまでざわついていた部屋が一瞬にして静かになった。みんな先生の話に真剣に耳を傾けているのだ。

\*

南の大怪鳥、西の獅子の樹、北の甲冑狼、孤島の多頭蛇。先生の口から語られるその短い旅行記はまるでお伽噺のようで、信じられないような話ばかりだけれど、先生が嘘をついているようには見えないしそして何より先生の話し方はその話に現実味を持たせてくれる。

「ライオンが棲んでるの？おつきな樹に？すっげえ！」

「鉄の皮でできた狼の皮つてどうなったの？」

「首が八本もあるの？ 強いのか？ その蛇」

子供たちは興奮で今にも燃え上がりそうだった。いや、すでに熱気で湯気が出た。僕も子供たちもみんな汗でぐちゃぐちゃになるくらい興奮していた。

「じゃあさ、じゃあさ、世界のどこかにはドラゴンもいるのかな」

一人の男の子がそんなことを先生に聞いた。先生の顔が一瞬強張

つて、額から一滴の汗が流れ落ちるのを僕は見た。

「いませんよ、ドラゴンなんて」

「え、だって」

「あれは空想の産物です。実在しません。現に私が世界中を旅して回ってもそんな生き物を見たことが無いですね」

先生の顔はいつものように穏やかだった。少年を叱っているというのではなくただただ自分に言い聞かせようとしているみたいだった。

「人語を解するだとか魔法が使えるだとかは昔の人の妄想にすぎませんよ。何か見えない力に怯えて作りだした虚像に過ぎないんです」

\*

子供たちが帰ると家は急に寂しくなる。僕が散らかった部屋の片づけをしていると窓際に立っている先生が見えた。なんとなく物憂げな顔で見えないはずの夕焼けを見ているようだった。

「先生」

「ん。なんです、ロッシュ」

「今日の先生、ちょっと変だった」

「あはは、少し熱くなりすぎたようですね。でも正しいことを伝えるのが教師としての私の仕事ですからね」

先生は笑いながらそんなことを言うけど、その笑顔にはどこか嘘があった。

夕焼けで部屋が真っ赤に染まっていた。

「ねえ、先生。教えてよ、先生が旅をした理由を」

「理由ですか。そうですね……実は私はドラゴンを探していたんですよ」

「ドラゴンを？」

「はい。世界の果てまで行きましたよ、東の果てにドラゴンを祀る集落があると聞いてましたからね。ま、でもね」

「いなかっただの？ 東の果てには」

「いませんでしたよ。そこには深い湖があっただけです。そしてそこで私は光を失いました」

先生の目が見えなくなつた理由を僕は初めて知つた。そんな東の果ての一人の知人もいない中、先生は光を失つたのだ。

「どうして、なにがあつたの？」

「私にもわかりません。気が付いたら何も見えなかつた」

「そう、なんだ」

「まあ、失明したことで色々なことがわかりましたけどね。人は見えないものに恐れを抱きますが、本当に何も見えなくなるとかえつてそんな恐怖が幻想だつてことがわかります。見えないことで見える真実だつてあります」

先生は笑っていた、それはいつもの先生の笑顔だつた。

夕日は沈み、夜の闇が部屋の隅から段々と広がって行つた。

## 第七話「月花祭と満月」

村の中心部には風車がいくつも建っているが、その中でもひととき大きな粉挽き風車は我が村の名物となっている。

粉挽き風車の名の通り、古くから小麦粉の製粉に使っていたもので、他の風車も農業用に地下水を引き揚げるためのものである。この村の風車はこの村の繁栄を象徴するものであり、昔から収穫の時期になると風車の周りに人が集まって宴を開き豊作を天に感謝したと言われる。

その収穫の宴が現在の月花祭へと受け継がれているわけだ。

風車横の中央広場には祭壇が作られ、周りに大小様々なテントが立てられ色とりどりのランタンが灯を燈して輝いていた。至る所で誰にも彼にも酒や料理が振舞われるのは月花祭が収穫祭であったことの名残なのだろう。

夕日は沈み始め、広場に続く大通りはランプで明るく照らされた。人通りもだんだんと増え始め中央広場は途端に騒がしくなった。騒がしさは数日前から調子の悪い大風車の雑音をかき消してしまう程だった。

「それにしても修理工はまだ来ないのか。あれが悪くなってからも一週間は立つぞ」

「どうも今の時期は何かと物入りだそうで、あと数日はかかるみたいですよ」

「そうか、祭りまでには直して貰いたかったんだがな」

「まあ、大丈夫でしょう。建具屋にちよつと様子を見に行かせたら歯車の調子が悪いらしく、何もすぐに壊れるほどの欠陥じゃないのであのままでも安全性は問題なしということですよ。一応、風車の稼働も一割程度に抑えていますし、雑音もあれくらい小さければそんなに気にするほどではないのでは」

「ああ、わかった、わかった。御苦労だったな、世話焼きのパンサー議員殿」

「これはこれは身に余るお言葉ですよ、石頭のハイネ議員殿。それにしてもどうしました、石頭殿。さつきから帳面を見ながら随分と渋い顔をしていますか」

「ふん、アレだよ、アレ」

俺は向こうの方にある仮設の小屋を見つめた。そこには今年の花娘、つまり14歳になった踊り子たちがいる。

\*

「うーん」

「どうしたのかしら、ドルサナさん。さつきから難しそうな顔をなさって」

「あ、ええ大丈夫ですわ。何でもありません」

「ならいいですけど。そんな顔をしてるとせつかくの可愛いお顔が台無しですからね」

「あら、そんなことありませんわ。あなたもとっても似合ってますわよ、そのピンクのドレス」

「そんな。ドルサナさんからそんなこと言われるとなんだか恥ずかしいですわ」

そんなことを言うとピンクのボンレスハムは顔を赤らめながら部屋の隅の人ごみの中に消えて行きました。部屋の中は月花祭に出場する人でいっぱい、皆さん自分の衣装直し必死です。ちよつと見渡すだけでも50人くらいはいるんじゃないでしょうか。

どんなに高価な服で着飾っても、白粉を塗りたくって香水をかけたも肝心の花娘の素材が悪ければそんな装飾は醜さに拍車を駆ける

ものでしかないことに、皆さん気づいてないんでしょうか。それでも皆さん目の色を変えて鏡と衣装に何度も視線を行ったり来たりさせています。

皆さんきつと今年の月花美人を狙っているんでしょう。

年に一度の月花祭で数多くの花娘の中から一人だけ選ばれる月花美人。それは美貌と才智の象徴でその名を冠することはこの村では栄誉なのだとお父様がこの前言ってました。

でも私はそれが可笑しくて仕方ありません。だって皆さんがどんなに着飾って自分を美しく見せようとも皆さんが月花美人に選ばれることなんて無いんですもの。

「月花美人になるのは私ですわ」

月花美人に選ばれるのはこの私、ドルサナ・ロレンソなのは誰の目にも明らかなのです。

「この村で私より可愛い娘はいませんわ」

端正な顔立ち、すらりと長い脚、母性を象徴する胸、どれをとっても私に欠点は見つけられません。

それに私、自分で言うのもなんですが結構賢い部類に入ると思えます。お父様は私のためを思って遠くの大きな街から腕の良い家庭教師を雇っています。私がその家庭教師を論破することも珍しくはありません。少なくとも同年代の子たちよりはずっと賢いはずですよ。

美貌、才智、財産、その全てを手にしている私に村の女性からの憧れや嫉妬の眼差しが向けられることもあります。ですが、村の老若男女すべてがその性差、年の差の壁を飛び越えて皆さん私を惚れた目で見つめるほどなのです。

「私は全てに愛されているんですの」

私は笑ってグラスの中のチェリーを一粒とって舌の上で遊ばせま

そう、私はお菓子を食べながら笑っていればよかったです。そのはずだったのです。

「あの女、まだ来てませんか？ いったいどこで何をしてるのかしら」

あの女、ロツシュとかいうあの貧乏人が月花祭に出るらしいです。それも花娘として。

あの貧乏人が花娘になると聞いた時、お腹の奥底から笑いが込み上げてくるのを感じたのです。ですからその貧乏人を徹底的に痛めつけるためにその娘の家に行きましたわ。

村長の孫娘と聞いていましたが随分と粗末な小屋で粗末な服装を着てました。月花祭に出たとしても到底、私の敵ではありません。

あの娘のプライドをズタズタに引き裂いてやるうと思いましたが、あの娘もなかなか強情で、最後にはあのキーフェとかいう変人まで出てきて私を追い払います。

私は怒っています。

所詮、あの娘がどんなに頑張っても私に勝つことなど万に一つも無いのですが、何としてもあの娘にはこの月花祭で敗北以上の屈辱を与えてやらなければ気が済みません。

「さあ、私の準備は出来ていますわ。さっさと姿を見せなさい」

花娘待機室に一向に現れないロツシュを待ち続けながら、私はイライラと葡萄の実を噛み潰すのでした。

\*

ここは大通り。この道をまっすぐ行くと大風車と中央広場に着くんだ。

そう、まっすぐ行けば着くんだけど。

「なんなのさ、この人の多さ」

月花祭当日ともなるとこの大通りはで店も出て、人で溢れかえってしまふ。僕はこの人ごみに吞まれて、さっきから一步も進むことが出来ない。

早く中央広場に行かないと祭りが始まっちゃうよ。僕は花娘として踊るはずなのにどうしてこうなったんだよ。

それもこれもあのクソガキどもが迷子になるからいけないんだ。

先生と旦那は先に中央広場の方行っちゃってるし、お祭りではしゃいでる子どもたちは迷子になるし。

僕は大通りで迷子になった子供たちを捕まえて、建具屋の奥さんに預けたあと必死で中央広場に向かって走った。走った……うん、走ったよ、でもね。

「でも、こんな人の塊の中でどうやって走れって言うのさ！」

祭りの人ごみの中で叫んでもその声は人の声で虚しく消えるだけだった。

もう、ヤケだった。僕は無理やり人ごみを押し分け、分け入って進んだ。

すると、誰かが服の裾を引っ張った。僕はこけた。

「痛い、誰だよ。僕をこかしたのは」

「こんなところで何してんだよ、ロツシュ」

振り向くとそこにはクソガキがいた。そうだ、さっき迷子になったクソガキがいた。

「アンタが迷子になるからこんなことになってるんでしょが！」

「あーもう、謝るから許してよ。でも早くしないと祭りに間に合わないぜ」

「この人ごみの中でどう急げって言うのさ。魔法使いみたいに空でも飛んでみる？アンタみたいなクソガキ一人ぐらいならすぐ吹っ飛ばしてあげれそうだけど」

「クソガキ、クソガキうるさいな。いいか、まともに大通りを突き

抜けるからいけないんだよ」

「じゃあ、どうすればいいのさ？」

「抜け道を使えばいいんだよ。ほら、こっちだよ」

「あ、ちよっ」

クソガキは僕の手を握って人の流れとは反対方向に走って行った。僕の前を走るクソガキの背中が思ったより大きいのに気がついて僕はちよっと戸惑ってしまう。クソガキの左手は僕の右手をしっかりと掴んで離さない。

顔が熱くなっていることに気付いた時には僕たちは人気の少ない林の中に来ていた。

「ほら、あっちの方にまっすぐ行けば中央広場に通じててるから」

「こんな暗い獣道を女の子に走って行けって言っの？」

「なあに、そこそこはちゃんと考えてるさ」

そう言うときクソガキは草むらでガサゴソと何かをしている。僕の方は走ったせいか動機が少し激しくなっていた。

「ほら、こいつに乗っていけばあっという間だぜ」

クソガキは草むらの中からロバを一匹連れてきた。痩せていて見るからに元気の無さそうなロバだ。

「この痩せロバに乗って行けっの？ 大体、僕はロバに乗ったことないし道も知らないんだけど」

「大丈夫だって、俺は毎日このロバに乗って広場まで行ってるからさ。道はこいつがしっかり覚えてるからさ。しっかり掴まってるや、すぐに広場に着くさ」

「え、ちよっと待ってよ。僕一人？ クソガキも一緒に着いて来てくれるんじゃないの？」

「馬鹿言っなよ、このロバの定員は一人までだぜ。二人も乗ったら潰れちまう」

はつきり言って夜道、それもこんな林の中の獣道は怖すぎる。そこを一人で、慣れない動物に跨って珍走するなんて正気の沙汰じゃ

ないと思う。

「ちよ、そんな」

「ほら、早くしないと祭りが始まっちゃうぜ。さっさと乗って」

「クソガキ、後で覚えてなよ！」

「はいはい、しっかり掴まってるよ。そいつは見かけによらず速いからな、振り落とされるなよ」

「勝手にしな、クソガキ」

「クソガキ、クソガキって一歳しか変わらないんだけどな。まあ、いや。行くぜ、ほれ！」

クソガキがロバのピシント一発、お尻に鞭打つと元気のなかったロバは悲鳴を上げて、勢いよく走り出した。僕は振り落とされないうろロバの首にしっかりと抱きついて、クソガキの方を振り返る。クソガキの姿はすぐに暗い闇の中に消えていった。

このロバ、速い、速すぎる。

振り落とされないようにしがみつくのが精一杯だ。

林の木々の中を区切りぬけるようにして走るから木の枝が顔に当たる。痛い。

木の枝が顔に当たって痛いから頭ごとロバの首にうずめる。心なしかクソガキの匂いがする気がする。心臓の鼓動は速くなるばかりだ。どうしちゃったんだろう、今日の僕は何だか少し変だ。

何だか気分が変なので気を紛らわせるために、とりあえず何か叫んでみることにする。

「きゃー、速い、速い。これならすぐに広場に着けるよ！」

そう、このスピードなら広場に着くのは時間の問題だ。お、ランタンの明かりがみえてきたよ。

だけど、僕はここである問題に気がついた。

「ど、どうやって止まるんだ、これ」

このロバ、止め方が分からない。クソツ、なんでこんな大切なこと教えないんだよ、クソガキのクソ野郎め。

「あわわわ、どうしよう」

僕が慌てているのも気にせず、痩せロバは全速力で走り続ける。

そして、小高い垣根を飛び越えた。その瞬間、僕はロバから振り落とされて地面を転がって、何かにぶつかった。

「いつてて」

「何だ、貴様は」

痛たた。どうやら僕がぶつかった何かは人間だったようです。

黒い服を着た黒髪の、背の高い男の人がしゃがんでいる僕に手を差し伸べる。

「立てるか？」

「あ、ありがとうございます」

僕が起き上がると、男の人は僕をじろじろと眺める。頭の前からつま先まで。

ああ、そういう趣味の危ない人なんです。それじゃあ、僕は急いでるんで失礼させてもらいます。

「それじゃあ、僕は急いでるんで失礼させてもらいます。月花祭に間に合うようにしなきゃいけないんで」

「おい、ちよつと待て」

そさくさとその場を立ち去ろうとする僕を危ない人が呼び止めます。ああ神様、僕は一体どうなっちゃうんでしょうか。

「貴様、もしかしてロツシュ、いやロツシ ナ・パサモントか」

「え、はい、そうですが。そう言うあなたは？」

「俺の名はハイネ・パサモント」

月が奇麗に輝く夜、僕の名前を知る謎の男の人を僕は知っている  
のかも知れない。

その人に会ったのが何時のことなのか、何処のことなのかは分  
らないけど、そう、あの時もこうして満月が二人を照らしていた、  
そんな気がする。

## 閑話01「昔語り：血の満月」

十四年前、まだ十五になったばかりの俺は村議会に参加する権利すらなく、毎晩毎晩、村の大門の上で見張りの仕事をするしかなかった。

月花祭も終わり、風も冷たくなってきた。こんな寒空の中でもあの天の月は煌々と輝いている。

「それにしても、今日は冷えるな」

「遅いぞ、ハイネ。俺を凍死させる気が」

「そう怒るなよ、パンサー。ちよっと村会所の方に顔出してきたんだ」

「へっ、村議会に媚売りがい。どうせもう少ししたら村長の息子のお前は自動的に村議会に組み込まれるっていうのに」

「媚売って来たわけじゃないんだがな。今日は親父が隣村に出かけていないから留守中の言伝なんかを聞いてきただけさ」

「本当のところはどうだかな」

「まあ、そんなに拗ねるなって。ほら、遅れたお詫びにさコレ持ってきてやったぜ」

「おお、酒か」

「正確にはブランデー入りの紅茶だ。寒いからな、交替の時間までこれで温まろう」

「ふふふ、実は紅茶入りのブランデーなんじゃないのか」

「さあね、それはどうだろうな」

湯気の上がる紅茶を飲みながら俺達は笑いあった。門番の仕事といても近頃は夜盗や魔物も姿を見せないから実質は有名無実の見張りなのであった。

「にしても、今日も何の異常もないな。この村はアレが一番近くにあるのにな」

そう言ってパンサーは遠くの方にそびえ立つ小さな山のようなものを指差した。

夜の闇の中でもその小さな山ははっきりと確認することが出来た。常に火を、禍々しい色の灯を燈し輝く、その山のような建物を人々は魔王城と呼んだ。

魔王城には魔王が住んでいる。魔界とこの世界を繋ぐ穴があるとも言われていて魔物たちがその穴から出てきて世界各地に散らばったと言う。野生化した魔物はしばしば旅人や村を襲う。

魔王城に近いこの村も例外ではなく、過去に数度、魔物の大群に襲われたことがある。

ところが、不思議なことにここ数日は魔物の一匹すらも見かけない。

「まあ、最近は腕の立つ勇者が結構いるみたいだからな。魔王も勇者を倒すために集められるだけの魔物を城に集めているんだろう」

「ふうん、勇者って漆黒のガウラとか竜殺しのキファーノとかか？

噂は聞くけどそんなに強いのかね」

「噂になるくらいなんだから強いんじゃないのか」

「でも魔王を倒した人間なんて聞いたことがないぜ。どうせその勇者様たちも魔王城の屍の一つになるんだろ」

「パンサー、お前はあの減らず口を何とかしたらどうだ」

「へへ、酔ってるってことで許してくれよ」

「全く、お前というやつは……」

パンサーに呆れた視線を向けていると次の見張りが来たので、俺は酔ったパンサーを引きずりながら見張りを交代した。

「うええ、やっぱり寒いな」

「そういう季節だから仕方がないだろ」

「な、紅茶入りブランデーまだ残ってるんだろ？」

「残ってたとしてもお前にはもう飲ませないさ、酔っ払いのパンサ

「君」

「クツソ、この石頭！」

そう言っつてパンサーは道端の小石を思いっきり蹴り上げた。小石は勢いよく近くの氣にぶつかり、そして跳ね返つて見事パンサーの額に命中した。額を痛そうに押さえながら道端で呻いている。

「お前は俺と違つて石頭じゃないからさぞかし痛いだろうな」

「ハイネ、てめえ……ああつ痛てええ」

苦痛に悶えるパンサーをよそに俺は寒空を仰ぐ。夜闇の空には満月が美しく輝いていた。

「あ、そう言えば、ハイネ。そろそろなんじゃないのか、バイエルさん」

「ん、ああ、そうだな」

「なんだよ、その生返事は。いいから早く帰つてやれよ、今日は村長もいないんだろ」

「ああ」

俺が二度目の生返事を飛ばすとパンサーに蹴りを入れられた。蹴られたところをさすっていると、パンサーは第二撃の用意をしていた。なので俺は急いで屋敷に帰ることにした。

\*

屋敷、俺は自分の家のことをそう呼んでいた。三階建ての白い石造りの洋館、高価な装飾、雑事を取り行う侍従達、これを屋敷と言わずして何と言うのか。俺は屋敷の重い扉を開いた。するとそこには執事のオークラが立っていた。

「どうしたオークラ、帰つてすぐにお前の髭面を見るのは心臓に悪いぞ」

「それがですね、ハイネ坊ちやま。バイエルお嬢様が……」

「姉さんがどうしたんだ！ 容体が思わしくないのか」

「いえ、それがですね……」

「ああ、何をお前はしてたんだ！ 親父と俺がいない間はこの屋敷のことはお前たちに任せてるんだぞ」

俺はオークラを押しつけて姉さんのいる二階へと続く階段を駆け上がった。

姉さん、バイエル姉さんは村長の娘、つまりは俺の実の姉なんだが、これが少し変わっている。

数年前、姉さんは親父の反対を押し切って魔物退治の旅に出た。姉さんは俺や親父とは違って魔術の心得があつたし、魔物を素手で狩れるほどの人だったので姉さんが旅に出た後もその身の危険を案じる人はあまりいなかった。要するに俺の姉はマジシャンでデストロイヤーだったのだ。

そんな姉が半年ほど前、突然ふらりと村に帰って来た。それだけならまだいい、問題は他にある。姉は身籠っていたのだ。当然、親父は「誰の子か」と問い詰めるが姉は「私の子だ」と言っただけで黙秘権を行使している。

とはいえ、母体は大事にしなければならぬ。親父は姉のために産屋を拵え、侍従の数を増やし、屋敷に医者をつまわせた。

医者に言わせると母体も胎児も健康でそろそろ出産予定日だと言っただけらしい。

実を言えば、俺は怖かった。姉が父親の名を言おうとしないのが引掛かった。もしかしたら魔物との亜人が生まれてしまうのではないか、と内心恐怖感を抱いていた。

姉の部屋の前に着いた俺は心臓がバクバクと音を立てる中、汗ばんだ手でドアノブを握り、そしてドアを思いっきり開けた。

「大丈夫か！ 姉さ……ぶへっ」

勢いよくドアを開けた瞬間、俺の顔面に枕が飛び込んできた。何

だ、何だ。俺はわけがわからず姉がいるはずのベッドの方に目をや  
った。

「うるっさいわよ、愚弟」

そこには数名の侍従と、デストロイヤーの二つ名を持つ我が姉が  
いらっしやった。

「こっちは出産で疲れてんのよ。アンタ、もうちょっと静かに部屋  
に入れないの？」

「うう、ごめんよ、姉さん。って、え？ 生まれたの？」

「見て分かんないの？ ほら、この子が私の子よ」

そう言つと姉さんは抱いていた赤ん坊を俺に見せてきた。さつき  
まで抱いてた恐怖感が頭をよぎり、俺は恐る恐る赤ん坊の顔を見た。

「か、かわいい」

「でしょ、女の子なの。私に似て美人でしょ」

その赤ん坊は魔物の子ではなく、姉さんと同じ栗色の髪の可愛い  
女の子だった。

「でも駄目よ」

「え？ 何が」

「いくらかわいくても手を出したら駄目よ、ロリコンの弟」

「そういう意味のかわいいじゃねえよ！ それに俺はロリコンでも  
ない」

いわれのないレッテルを張られて怒る俺を侍従達が必死で取り押  
さえる。

俺の悲痛な叫びが満月の夜に虚しく響き渡った。無論、うるさい  
と言われて姉さんに殴られたの言つまでもない。

「この子の名前はね、ロツシナ。ロツシーナ・パサモントよ」

「なあ、姉さん」

「何よ、いい名前でしょ」

「いいか姉さん聞いてくれ。その子供は一体誰の子なんだ」

俺は何度も言っただけ使って使われ古された質問をした。

赤ん坊、ロツシナがどうとかいう問題じゃない。この子の父親がいるのなら、どんな男なのかを知るのは家族として当然の権利だし、親権などの問題もある。いずれ問題が起るのならそれを姉さん一人が抱えるものではない。

「何度言わせれば分かるのよ。私の子って言ってるじゃない」

「んー、そうじゃなくてだな。父親は誰なんだ、父親は。女一人じや子供は生まれない」

「いい？ ハイネ、世の中にはね知らなくていいことの方がたくさんあるの」

「まさか、姉さん。その子の父親が誰かわかんないとか……。不潔だよ、姉さん」

「うるさいわ、ボケ」

俺がピンク色の妄想を繰り返していると姉さんに顔を殴られた。鼻血がたらりと流れた。

「ともかく、あんたが考えてるようなやましいことはしてないし、事件に巻き込まれてるとかいうこともないの」

「じゃあ、誰なのか教えてくれよ」

「それは駄目よ」

「何でさ。やましいことがないなら教えてくれてもいいじゃないか」「禁則事項です」

「何だよ、それ」

「とにかく、今は無理ね、教えられない。でも、時期が来たらアンタにもお父さんにもちゃんと話すわ」

そう言う姉さんの目が一瞬憂いを帯びたように思えた。

「お嬢様、坊ちやま、一大事ですぞ！」

非常にピリピリとした嫌な雰囲気の中、執事のオークラが鬼のよ  
うな形相で部屋に飛び込んできた。

「どうしたオークラ、そんなに慌てて」

「魔物がやって来たのです」

「え？」

「魔物です、それも大群の。最近めつきり姿を見せないと思ったら  
こんな時に」

「門番や村の衛兵はどうしたんだ」

「殺されました」

執事のオークラがそう言ったとき一階で侍従の絹を裂くような叫  
び声が聞こえた。

「クソツ。奴らとうとうこの屋敷にまで。お嬢様、坊ちやま、速く  
お逃げください、魔物がこの部屋に来る前に」

「逃げるつたつてここは二階だし、外にも魔物がいるだろう」

「坊ちやま、心配には及びません。廊下の突き当たりに地下へ続く  
隠し通路がございます。そこからお逃げください」

「隠し通路？ そんなの初耳だぞ」

「隠さなければ隠し通路とは言えますまい。お喋りはいいですから  
早くお逃げください。魔物どもは私が何とか抑えておきますから」

「それは駄目よ。私も残るわ」

そこでさつきまで話の輪から外れていた姉さんが口を開いた。

「お嬢様、わがままを言わないでください」

「そつだよ姉さん。早く逃げよう」

「まあ、聞きなさい。流石にオークラ一人では魔物が襲つてたら3  
0秒と持たないわ。そんな状況で逃げて、魔物たちに背後から襲  
われて全滅っていうのが関の山よ」

「だからって姉さんも残ること無いだろ」

「アンタ忘れたの？ 私は魔物退治のスペシャリストよ。魔物の一匹や二匹わけないわ」

確かに姉さんの手にかかれば並みの魔物なんて一発だろう。魔法の腕も一級だから、もしかしたら今回の魔物たちも姉さん一人で全滅させられるんじゃないだろうか。

「だけど、ダメだって！ さあ、姉さん一緒に逃げよう。魔物が襲ってきたら逃げながら姉さんが魔法で倒せばいいじゃないか」

「残念だけど、それは無理ね。今の私の体力じゃ、人を守りながら闘うなんて到底無理よ」

「でも……」

「いいからアンタはロツシ ナ連れてさっさと逃げなさい。ほら、グズグズしてたからもう来ちゃったじゃない」

姉さんはそう言うのとドアの方を指差した。ちょうどそのとき、ドアが破壊され、破れたドアの向こうには人狼の魔物がいた。

一、二、三……少なくとも五匹はいる。もうこれは絶体絶命だ。

俺が死を覚悟してブルブルと震えていると、姉さんは開いた右腕をそつと魔物の方に向けた。次の瞬間、真つ赤な業火が人狼たちを覆い尽くして、燃やしつくしてしまった。真つ黒な消炭だけが残された。

「詠唱破棄ですか。お嬢様、ご立派になられて」

「ほら、ハイネ。さっさと逃げなさい。ここは私とオークラが何とかするから」

「だけど……うっ、ぐはっ」

姉さんが俺の襟を掴んでギリギリと締め上げる。それはもう苦しくて、俺は気が動転していたということもあり涙目になってしまった。あれ、姉さんも泣いてる？

「この状況じゃ、ロツシ ナを助けることができるのはアンタだけなの。お願いだから、速く逃げて」

姉さんは泣いていた。どうして姉さんが泣いていたのかは今でもよく分からない。だけど俺は姉さんの涙を拭ってやり、両肩に手を乗せ大きく頷いた。

「わかったよ、姉さん」

俺は赤ん坊を受け取ると魔物の有無を確認するように廊下をきよるきよると見回した。

「ロツシ ナを頼んだよ」

「うん、任せろ。姉さんも死ぬんじゃないぞ」

「ふん、私を誰だと思ってるんだ」

「坊ちやま、早く行って下さい！ 魔物もまたすぐにやって来ます」

「ああ、わかってるよ」

俺は赤ん坊を抱いたまま、全速力で廊下を走りぬけた。

\*

「にいたん、はいね兄たん」

「はいはい、今行くよ」

季節は巡り、あの日からもう4年が過ぎた。

あの夜、衛兵の本隊が屋敷に到着したときには魔物はすでに息絶えていた。

あれだけの大群を一人で片づけた姉さんだったが、疲労は限界に達していたらしく血まみれの部屋の中で姉さんは倒れていた。

衛兵たちに抱えられて屋敷から出てきた姉さんは集まっていた村人の中にいた俺を見つけるとよろめくようにして俺の方に歩み寄っ

て来た。俺の腕の中で静かに眠るロツシ ナを見て姉さんは安心そうな顔をして、「頼んだわよ」と言っただけで再び倒れた。それから姉さんが目を覚ますことは二度となかった。

死者は百人に上り、村人たちに一生消えることのない心の傷を残したあの夜はまさに惨劇だった。被害の中心は俺の屋敷で、生き残ったのは俺とロツシ ナの二人だけだ。執事のオークラも他の侍従達も皆死んだ。

姉さんも死んだ。

姉さんの墓の前であの気丈な親父が泣いていた。俺も泣いていた。だけど娘の死に際に立ち会えなかった親父に比べれば、俺はまだいい方なのかもしれない。

「今日はいい天気だな、ロツシユ」

「うん、お日様ぼかぼかだね」

「だけど残された俺達は「今」を生きなければならぬ。先に逝った人たちが残したものを」

守らなければならぬ。

姉さんが最後に託したものを俺は守り続けたいといけぬ。

「おーい、ハイネ。どうした、散歩か」

「ああ、ちよつとロツシユとな」

「ぱんさお兄たん、こんにちは」

「ああ、かわいいよ。かわいいよ、ロツシユちゃん。そうだ、キスしようロツシユちゃん」

「おい、やめる。この性犯罪者」

「へっ、ロリコンの村会議員様には言われたくないね」

「なんだと」

「あわわわ、お兄たんたちケンカはダメだよお」

ロツシユは健やかに育っていた。俺も念願の村会議員になり、親父もロツシユのおかげで元気を取り戻しているようだ。ただ、親父の強面のせいでロツシユはなかなか親父には懐いていないのだが。あ、あとパンサーは相変わらず門番の仕事に精を出している。こんな毎日が永遠に続くものだ、このときの無垢な子供のよう

に信じていた。

しかし、平穩は突如として崩れ去った。

ある雨の日、ロツシユが熱を出した。ちようど隣町から腕の良い医者が出ていたので、俺はその医者と呼ばひロツシユを見てもらった。熱はすぐに下がり、ロツシユは何事もなかったかのようにすやすやと寝ていた。

しかし、その医者は実に気まずそうな様子で俺にあることを伝えた。

ロツシユの身体から基準値を遥かに超える魔素が検出されたというのだ。

魔素、それはこの世の物質ではない。魔界のものだ。

魔法使いの素質がある者からは少々高い濃度の魔素を持っているし、姉さんも魔法が使えたからその娘であるロツシユから魔素が検出されても何らおかしいことはない。

だが、医者はこちら言う。普通、人間が許容できる魔素の量を遥かに超えている、そう、まるで魔物のようだ、と。

魔物。俺はかつて姉さんが魔物の子を産むのではないかと恐れていたことがある。だがロツシユはどこからどう見ても人間だ。魔物のはずがない。

検査器具の調子が悪いんだろ、と言って俺は医者を帰した。

疑念と戸惑いが混じった顔で窓の外を眺める。まだ雨が激しく降

っていた。

雨で景色がよく見えないが、俺が見ている景色にはかつてあったものが無い。そんなことを思い出した。

あの山のように巨大な建造物、魔王城は数年前、魔王の死とともに瓦解していった。

何でも伝説の勇者が魔王を倒したらしい。まあ、その勇者はその後に行方不明になったという話なのだが。

そのとき俺の頭に嫌な考えが走った。

もしだ、もし人とまったく同じ姿の魔物がいたらその子供の姿はどうなるのだろうか。もちろん、普通はそんな魔物なんているわけがない。異形であるから魔物は魔物であるからだ。

だが、例外が一つある。人の姿をした魔物が唯一存在することを俺は知っていた。

魔王である。

姉さんはロツシユの父親のことを一言も話さなかった。そしてあの夜、どういうわけか魔物たちは俺達の屋敷だけを狙っていたように思える。

もし、魔物たちがロツシユの魔素を嗅ぎつけてやって来たのだとすれば、魔王の子を姉さんが孕んでいたのだとすれば、ロツシユが魔物の大群を引き寄せたのだとすれば……。

……これ以上考えるのはやめておこう、どうせ確かめようにもみんな死んでしまっている。こんなことを考えるのは不毛だ。

俺は考えるのをやめた。しかし、一度湧いた疑念を取り払うのは難しく、すやすやと眠るロツシユを見ても俺は今までと同じようにロツシユに接する自信はない。

とりあえず、気持ちの整理がつかぬまま、俺は医者の方の話をお父さんに伝えることにした。

親父の部屋に入るとそこには村会議員の上役達と親父が興奮とも困惑ともつかぬ顔で何やら話し合っていた。

「ん、どうしたハイネ」

「いや、ちょっとロツシュのことだな」

「わかった、あっちの方で話そう。皆の衆、すまないが少し席を空けるぞ」

俺と親父はとなりの部屋に入って、そこらにあった椅子に腰かけた。

「で、ロツシュがどうした。熱は下がったそうじゃな」

「ああ、熱の方は大丈夫なんだが……」

「だが？」

俺は親父にロツシュの魔素について話した。そして俺の抱いていた疑念についても一緒に話した。

一通り話し終わると、親父は二、三度頷いて、どうにも物悲しげな表情をしていた。

「それより、何なんだ。村議会上役が集まって何の話だ」

「ん、ああ、そうか、お前はまだ知らんのじゃな」

「何を？」

「いや、なに。今朝、村の前で生き倒れになった旅人がいてな。そいつを門番のパンサーが介抱してやったんじゃが」

「まあ、旅人の生き倒れはそう珍しいことじゃないからな」

「そこなんじゃが、どうもその旅人の身なり、上物の剣や鎧からするとだな」

「行方不明の伝説の勇者かもしれないと」

「むむ、ここまで物分かりがいいと話す方はつまらないじゃないか」

「長々と回りくどい話をされる方が迷惑だ。で、その旅人が伝説の勇者だったらどうなんだ？」

「伝説の勇者ならそれなりの歓迎をしなければなるまい。ついでにこの村の発展に大きく寄与してもらおう」

「伝説の勇者じゃなかったらどうするんだ？」

「たとえ伝説の勇者じゃなくてもだ、その防具や傷のつき方から見て相当な腕を持っていてる方に違いない。我が村の衛兵団に所属してもらえばいいのじゃよ」

「そんなもんかね」

俺が退屈そうに親父の話を聞いていると、突然親父の顔色が変わった。そして、予想もなかった話が親父の口から発せられたのだ。

「その旅人にロツシユを預けようと思う」

「何でそうなるんだよ！」

「四年前の魔物はロツシユの魔素に引き寄せられてやって来たんじゃない。魔王が死んだと言っても魔物はまだうじゃうじゃという。いつまたあの惨劇が繰り返されるともわからんじやろう」

「だからってそんなこと……」

「腕の立つ者が常に傍にいれば、ロツシユの魔素に引き寄せられて魔物が襲ってきたとしても大惨事は防げる」

「それはそうだが……」

「ちょうど村の外れに小屋がある。旅人とロツシユをそこに住まわせよう。あそこならたとえ魔物が襲撃して来ても被害は最小限に抑えられるじやろ」

「あの小さなロツシユを犠牲にするっていうのか」

「小娘一人の犠牲で村が助かるのなら安いもんじやろ。それとも何か、お前はあの惨劇を繰り返したいのか、ハイネ」

「そ、それは……」

「お前だってバイエルの死の悲しみから癒えてはおるまい。そしてその死の原因がロツシユだと気付いたのじゃ、もうお前は今までと同じくは接することは出来まい」

「……」

「つまらん意地は捨てる。お前の心に宿り始めた憎しみの火はお前が一番分かってるじやろ。次の村会でワシが皆に言うでしょう。お

前は来なくていいぞ、まだ心の整理がつかないだろうからな」

親父はそう言うと、部屋を出ていった。

部屋に一人残された俺は自分の胸のあたりから湧いてくる黒い何かを必死に抑えようともがいていた。だが、駄目だった。

親父の言った通り、俺の中にはどす黒い憎しみの炎がじわじわと燃え広がっていた。この怒りがロツシュに対するものなのか、それとも自分の無力さに対するものなのかは分からない。

俺はドロドロに痛む胃を抑えながら、窓の外を見る。

雨はもう止んでいて、すっかり暗くなった空にはあの日と同じ月が、血に塗られた満月がギラギラと俺を突き刺すように輝いていた。

## 閑話01「昔語り：血の満月」（後書き）

今回は時系列がずれるので閑話と言う形にさせてもらいました。

いきなり魔物だの魔王だのが出てきて戸惑った読者さんもいられるかもしれませんが、この作品は「拝啓、魔王さま」「や」「前略、勇者さま」と同じ世界観ですので悪しからず。

あの話とこの話はリンクしているとかいないとか……。

## 第八話「僕と花娘」

光が消え、舞台は闇に包まれた。

するとどこからか笛の音が聞こえ、誰かが太鼓を叩く音も聞こえ始めた。

音は、ゆっくりと、そして少しずつ大きくなって、いくつもの音色が重なり合って闇の中を舞っていた。

そしてポリリウムがガンと急に大きくなったら舞台の上の闇が消え、キラキラと輝く妖精が現れた。

可憐な花娘たちは音楽に合わせて踊り始める。踊り場の上をクルクルクルクルと廻る花娘はさながら妖精のようで、見る人を魅了した。

ライトの光に照らされるのは花娘の衣裳に散りばめられた宝石で、赤、青、緑の小さな光が集まり、そして霧散する。

「月には妖精が住んでいる」

小さい頃、建具屋の旦那がそんなことを言った。

月はあるなに綺麗なのだから妖精の一人や二人いてもおかしくないといつて僕は妙に納得したことを覚えている。兎や蟹なんかより想像に難くないし、それになんだかロマンティックだ。

月に棲む妖精は月の光に乗って地上に降り、人に一夜限りの美しい夢の宴を魅せると言う。収穫祭である月花祭が太陽ではなく月を祀るのもこんな言い伝えによるのだろう。

だけど、月花祭の起源にはもう一つ逸話があるのだ。

昔、村は竜に支配されていたと言われている。

村人は竜に捧げるため風車で水を引き、畑を耕していた。しかし

暴君の竜は捧げものが気に入らないと畑を荒らし、風車を壊した。村人は涙を流しながらも風車を直し、畑を作り直した。

竜が怖ろしかったのである。触らぬ神に祟りなし、という風に竜を極力刺激しないようにしていた。

しかし、竜の暴虐ぶりは日に日に酷さを増すばかりで遂には生娘の生贄を要求してきた。

これには村人も頭を抱える。だけど、竜には逆らえず村一番の美しい娘を生贄に出すことに決めた。

そこで一人の武人が村を訪れた。武人は村人から話を聞き、生贄の娘を助けることを誓った。どうして都合よくこんな武人が現れたのかは定かではないけど、建具屋の旦那によれば、村の外で泣く村娘を見て武人は一目惚れしたらしい。

動機が不純すぎるけど、こう言うのはどこにでもあるお話のパターンらしい。

さて、ついに生贄の日の朝がやってきて武人は竜と対面することになる。

武人は剣を抜いて竜に切りかかった。竜は当然のごとく暴れ回って、風車は全て叩き壊された。

武人は人としては強かったけどさすがに相手が人外ともなるとそう簡単に勝負はつかない。朝方に始まった戦いだっただけどすでに日が沈み、月が武人と竜を照らしていた。

竜も武人も限界に達していた。武人は最後の力を込めて剣を竜の頭上へ振り下ろした。

竜の頭は真つ二つに裂け、真紅の血を吹き出して竜は死んだ。村人たちは歓声を上げて武人に駆け寄った。

普通のお話なら、武人は村人から祝福されて生贄の娘と一緒に暮らしてめでたしめでたし、といった感じで終わるのだろうが、そんなに都合よく話は進まない。

村人が何年かかっても倒せなかった竜を、武人は一人で倒したのだ。それなりの代償が武人のもとに降りかかると考えるのが当然だろう。

村人が駆け寄ったときにはすでに武人は息を引き取っていた。そして駆け寄った村人の中で大粒の涙を流している人が一人いた。生贄の娘であった。

生贄の娘は武人の骸を抱えて止まらない涙を流し、武人の持っていた剣で自分の胸を突き刺して絶命した。

二人の魂は月へと昇って行き、娘は妖精に、武人は月光となったという。

どうして娘が自ら命を落としたのかは分からない。ある人が言うには娘は慈愛の化身で自分のために命を落とした武人に特別な思いを感じ、武人とともに昇ろうとしたそうだ。

この娘は「月花美人」と呼ばれ、彼女を祀ることが月花祭の始まりだと言う。

花娘はそんな「月下美人」になぞらった巫女のようなものらしい。まあ、とにかくこうして月花祭にも間に合って、花娘として踊ることができてよかった。ちょっと前のごたごたは本当に困ったものだった。

\*

ちょっと前、広場から少し離れた木陰にて。

クソガキに借りた口バから転がり落ちた僕は僕の名前を知るハイネ・パサモントなる男に遭遇してしまう。

ハイネと名乗るその変質者に、僕はどういうわけか懐かしさを感じてしまう。でも、それがどうしてなのかは全くわからない。

そんなことよりも今は月花祭だ。こんなことをしてる間にも月花祭は進んでいるんだ。急がなくちゃ。

僕が焦りを見せ、そのまますぐにこの場から立ち去ろうとしたところだった。変質者が再び話しかけて来たのだ。まったく空気の読めない迷惑な変質者のロリコンさんだ。

「小娘、俺を知らないのか？」

「ええ」

「村議員のハイネ様だ。まあ、村議会のことなど貴様のような小娘が知っているわけないよな」

「はあ、そうですか」

ああ、話が始まってしまった。

僕は投げやりな返事を変質者に浴びせ、あわよくばこのまま何事もなく月花祭に参加できることだけを祈っていた。

「お前は俺のことを知らないが、俺はお前のことを知っているぞ」

「はあ」

「俺は村長の息子。つまり貴様の親戚に当たるわけだ」

これは長くなるぞ、話が。というか、この変質者が僕の親類だなんて流石に冗談がきつすぎる。どうせ僕の名前もどつかで調べたんだろう。村議員と言つのも嘘臭い。

さて、変質者を刺激しないようにこの場から立ち去らなければならぬ。

行動は迅速に、そして的確に。

「だが、村長の息子と言ってもお前の父親ではないぞ」

そんなの分かってるよ、バーカバーカ。ああ、こんなバカに付き

合つてたら時間がいくらあつても足りないよ。っていつか本当に時間が足りないんだけど。

「あの、僕ちよつと急いでるんで」

「何だ、何か用事でもあるのか」

「ええ、月花祭に遅れるんで」

「ほお、お前が花娘になると言う噂は本当だったのか」

「何なんですか、その白々しい言い方」

すると、男の顔から笑いが消え、目つきが鋭くなった。

「ふん、察しの良いガキだ。まあ、良い、やはり回りくどいのは俺には合わんな」

「どうでもいいですから僕に用があるならさっさと済ませて下さいよ」

「では単刀直入に言おう。ロッシ ナ・パサモント、今年の花娘は辞退しろ」

「はあ？ バカも休み休み言って下さい。あなたに何の権利があるんですか」

「権利？ そうだな、村会一等議員のみに許される諸事独断権といったところか」

そう言うつと男は胸から手帳を取り出した。

黒革の手帳には村の紋章と男の名前が金の刺繍で刻まれている。さすがに僕でもその黒革の手帳ぐらい知っている。黒革手帳の村会議員が市場で何件もの店を自分たちの都合で潰しているのはよく聞く話だ。

黒革の手帳を突きつけられてしまえば普通、村人には逆らう術が無い。

下手をすれば女子供といえども牢獄に繋がれてしまう世の中だ。大人しく村会議員の言うことを聞くしかないのだ。

「なんで。なんで僕が……」

「残念だが、お前を月花祭の舞台上に上げるわけにはいかない」

「理由を、理由を教えてください」

「理由か。そうだな、貴様もそろそろ知るべきだろう、自分の出生についてな」

「僕の出生？」

僕は母の名も、父の名も知らない。だが、目の前のこの男は僕の出生を知っていると云う。

僕は知りたかった。僕のお母さんはどんな人なのか。僕のお父さんはどんな人なのか。どうしてお爺様が僕を先生のもとに預けたのか。

だけど、この男が話そうとすることについて僕は嫌な胸騒ぎを覚えずにはいられなかった。

そして僕の動揺を無視するようにして男は語り始めた。

「14年前、貴様の母親は魔物に襲われ命を落とした。何故、魔物は貴様の母親を襲ったのかわかるか？ 実は魔物の本当の狙いは貴様の母などではなかったのだ」

ああ、もうそれ以上は言わないで。僕は、僕は。

「貴様だよ。魔物はな、貴様を狙ってきたんだよ」

男の声は酷く冷たく、僕を突き刺すように鋭い言葉だった。

「そ、そんなの嘘だ」

「嘘じゃない。貴様も気づいているだろう？ 貴様が他の村人と違うことぐらい」

「嘘だ！ うそだ！」

「貴様は魔物を呼び寄せる。だから村外れに守護剣とともに封じていたのだ。それなのに月花祭に出るだと？ 貴様は14年前の悲劇

を繰り返すつもりか」

「そんなのでたらめだ！ 全部あんたの作り話だ！」

「作り話だと？ 貴様のような小娘一人をどうこうするために作り事などする必要があるか。貴様のせいで姉さんは……」

男は急に言葉を詰まらせた。僕には何が起こったのか分からなかったが、男の体が小刻みに震えていた。

よく見ると男の後ろには二つの黒い影がちらついていた。その影は僕がよく知る影だった。

「その辺にしませんか？ 私の可愛いロツシュが怯えている」

「それに、村会議員さまの横暴は一村民として見逃すわけにはいかねえな」

「先生！ 旦那！」

よく見知った影は男を取り押さえて身動きが取れないようにしてくれている。旦那が男の手を後ろに回してがっしりと固め、先生が杖を男の首に突き付けていた。

「私は平和的に解決したいんですけどね。どうです？ その横暴な態度を改めるっていうのは」

「ふん、小娘一人と村の安全など天秤に掛けるまでもないだろうが」

「それはそうですけどね。ロツシュが魔物を呼び寄せるっていう証拠が無いじゃないですか」

「そのことか。その小娘はな魔素が常人の倍以上なんだよ。これで十分だろうが。疑わしきは罰せずじゃ、何かあった時には手遅れなんだよ」

男は杖を喉に突きつけられても臆することなく喋り続けた。

「ふーん。本当にそうですかね」

「何がだ。貴様、文句でもあるのか」

先生は杖を収め、顎をさすりながら口を尖らせた。

「どうも、あなたが全ての責任をロツシュに押し付けるのはもっと別な意味があるように思えます。そうですね、たとえばあなたのお姉さんの死に理屈をつけたがっているだけのようないな」

「な、何故お前が姉のことを知っている!?」

「14年前のことについては緘口令が敷かれているようですが、人の口に戸は建てられませんからね。薬屋っていうのは結構情報網が広いんですから」

「侮れん奴だな。だが、貴様の言い分は所詮貴様の妄想に過ぎん」

「いやいや、結構わかるもんですよ。匂いでね。私はこのように目が見えませんが人の感情とかそういったものまで嗅ぎ取れちゃうんですよ」

「嘘だな。それこそまさに貴様の妄想だ」

「信じてもらえないなら別にいいんですけどね。まあ、あなたも随分倒錯した感情を持っているようですね。ロツシュに対して抱いている憎しみは実のところ14年前の自分の無力さに対する怒りですよ」

「な……」

「自分に対する怒りのはずがいつの間にか最愛の姪、ロツシュに向けてしまったんですね」

「貴様、それ以上は……」

男は頭に青筋を浮かべて、旦那の拘束を薙ぎ払った。先生に向ける男の目は憎しみと言うより畏れがはつきり浮かんでいた。

一方先生は涼しい顔で微笑みながら男に話しかける。

「では、ロツシュが月花祭に出るのを邪魔しないで貰えますかね」

「く……。もし、魔物が襲ってきたらどうするんだ」

「私が倒します。一匹残らず」

先生の声は至って真面目だった。それは冷酷さを感じ取るぐらいに無感動に言い放ったのだった。

「ば、馬鹿を言うな。盲目風情に何が出来る」  
「目が見えなくても音と匂いで大体わかりますよ。それに私はロツシユの守護剣なのでしょう」  
「ふ、ふん。もし魔物が出たら貴様には困らなくてもらうからな！」  
そう言うつと男は物陰に消えて行った。

旦那は中指を立てて男の後ろ姿に罵声を浴びせていた。んー、酔ってるのかな？

先生は僕を抱き寄せて何やら説教を始めようとしていた。

「こんなところで何してるんですか、ロツシユ。もう月花祭が始まつちやうじゃないですか」

「あ、ごめんなさい。つて、くつさ！ 先生お酒臭い！」

「ああ？ いいじゃないですかお酒ぐらい飲んでも、私は先生なんですよ」

「あー、わかつたから抱きつかないで！ お酒臭いから」

先生の紅潮した顔を必死に押さえながら僕はなるべく息をしないようにした。

「がはは。キーフェ先生はなロツシユが花娘になるのが嬉しくてな、普段飲まない酒に酔っぱらったんだとよ」

「え、そうなの」

「そんなの決まってるじゃないですか。私の可愛いロツシユの晴れ舞台が嬉しくないわけないじゃないじゃないですか」

「せ、先生」

僕は何だか瞳が潤んでしまった。

先生が僕のために、僕のことを喜んでくれている。それがちよつぴり恥ずかしくて、そしてとても嬉しかった。

先生も僕を優しく抱きしめてくれる。先生の温かさが僕には心地

よかった。

「さ、早くしないと本当に間に合わなくなりますよ。急いで下さい、ロッシュ」

「おう、そうだけ。まあ、キーフェ先生は俺がちゃんと介抱してやるから気にすんな」

「あ、うん。それじゃ、行ってきます」

僕は向こうの広場の明かりの方へと走って行った。その足取りは今までよりずっと軽快だった。

## 第九話「月花祭とダンス」

僕が月花祭の会場に遅刻して登場すると役員の人は一、三の小言を言った。

けれども、あのハイネとか言う変質者の名前を出されると役員は青ざめてもう何も言わなくなった。

衣装小屋に入ると僕以外の花娘はもう舞台袖に行ってしまったらしく子猫の一匹もいやしなかった。僕は急いで衣装に着替えて舞台袖に集まった。

舞台袖には数十人も女の子がいて、みんな僕と同じ花娘なんだろう。

それにしてもさすが月花祭に出るだけあつて良家のお嬢様が集っているようだ。

話口調から身振りそぶりに至るまで僕みたいな庶民とは大違いだ。服装もやけにキラキラしてたりジャラジャラしてるのが多いけど、僕の衣裳も負けてないはずだ。

結局、先生の例の莫大な貯蓄は大部分が参加費および運営費に消えたみたいで、とても衣裳に高価な宝石をジャラジャラとあしらう余裕はなかった。

けれども、上等なシルクで作ったドレスと色とりどりの鉱石があしらわれた首飾りは決して他の花娘に劣るものじゃない。

建具屋の奥さんが縫ってくれたドレスに、旦那が加工した首飾りだ。世界のどんなものよりも美しいと僕は胸を張って言える。

「あら、遅かったわね。てっきり逃げ出したのかと思ったわ」

その声が僕に向けられたものと気づくのの数秒かった。聞き覚えのある声の主はいつぞやのドルサナ嬢だった。

黒のドレスに赤色の宝石をあしらったドルサナ嬢は悔しいほどの

綺麗だった。

そのままドルサナ嬢に圧倒されそうになるのを必死で堪えて喉の奥から強気な言葉をなんとか捻り出した。

「逃げる？ どうして僕が逃げるのさ。そんなことを言ってる暇があるなら、舞台の上で恥を掻かいたときのフォーローでも考えておくべきじゃない？」

「な、なんですって！」

ドルサナ嬢が顔を怒りで紅潮させたとき、踊りの始まりを告げるブザーが鳴った。

「お、覚えていなさい！ 舞台の上で恥を掻くのは誰か思い知らせてやりますわ！」

そう言っただルサナ嬢は向こうの方に行ってしまった。

僕の方はほっと一息ついて、何とか気分を落ち着かせようとしていた。

この舞台幕の向こう側には何百人という村人がいて、それも彼らは僕たちを、僕を見に来ているのだ。

これは否が応でも緊張で胸が高鳴る。鼓動が速くなっているのが手に取るように分かった。

花娘たちは舞台幕の裏側で数列に並び、その後方の列の中で僕は首飾りを握りしめてその高まる気持ちと和らげようとしていた。

でも、脈打つ鼓動の音を聞いていると緊張とは別の何かが自分の中で湧き出しているのを感じることが出来る。

この胸の高鳴りは緊張から期待に変わり、僕の胸の中は奥の方から湧き出てくるワクワク感でいっぱいになっていた。

そして、舞台の幕がゆっくりと開かれた。

「さあさあ、いよいよ始まりました！ 月花祭のメインイベント、花娘舞踏だ！」

やけにテンションの高い司会が舞台の片隅でスポットライトを浴びながら、マイク片手に叫んでいた。

ええと、名前は……覚えてないや。

舞台の幕が上がるとすぐに音楽が鳴り、ダンスが始まった。

もう僕の頭は緊張や何かでばわわしている。

「さあ、始まりの始まりから素晴らしいダンスを披露してくれた花娘たちに拍手う！」

会場全体から盛大な拍手が聞こえてくる。

拍手が空気をビリビリと振動させる。

「今年は例年以上に綺麗で可憐な花娘が参加してくれてるぜ！」

司会が大きな声でそう言うのと七色のスポットライトが花娘全体を照らす。

ちよ、そんなことされたらもつと緊張しちゃうじゃないか。

「どれくらい可憐かって？ そいつは口で言うより見た方が早い！」

さあ、お待ちかね！ お次はソロダンスだああああ！」

司会は喉が擦り切れんばかりの声で叫ぶと楽器隊の音楽が響きだした。

「まずはエントリーナンバー1番！ カザリン・ボスタフだ！」

カザリンと呼ばれた少女が舞台の真中に飛び出した。

そして音楽に合わせて他の花娘は舞台の周りを円のようについで

踊りながら回り始めた。

カザリンはその花娘の輪の中心で一人ずつ踊る。これがソロダンスだ。

みんな違うオリジナルのステップ、振付で踊るこのソロダンスはこの祭の中で一番の盛り上がりどころで、一番の見せ場でもある。

このソロダンスの良し悪し一番人気の花娘、つまり月花美人が決められると言っても過言ではない。

僕の出番はまだ後だ。それまでにこの心臓のバクバクを止めなくちゃ。

心を落ちつけて足元のステップを見ながら回っていると、突然さつきまで聞こえてきた歓声が聞こえなくなった気がした。

一瞬、集中したせいで周りの音が聞こえなくなったのかと思ったけれど、違った。

観客は本当に声を失っていた。

その顔は驚きよりも陶酔の色が濃かった。

その理由は花娘の輪の中心を見ればすぐにわかった。

「きれい……」

そこにはとても美しい少女がいた。まるで月の精が舞い降りたかのような衝撃を僕は覚えた。

黒いドレスに映える赤色の宝石、月明かりに照らされて妖艶に光る白い肌。そして冷たく光る蒼い瞳。

それはドルサナ・ロレンソ、その人だった。

「さあ、エントリーナンバー21！ 月花美人最有力候補のドルサナ・ロレンソ嬢だ！」

司会の一言とともに会場から溢れんばかりの拍手と歓声が聞こえ

てきた。

舞台前のあの自信は嘘ではなかったみたいで、あれだけ彼女を嫌っていた僕でさえもその美しさに陶醉してしまった。

てつきり金持ちでちよつと顔が良くて性格の悪い口先ばつかだと思つてたのに、その洗練されたダンスは見る人全てを魅了する。

彼女のダンスのせいで他の花娘がすっかりばやけてしまった。

これはちよつと敵わないかもしれない。

彼女にあれだけ啖呵を切ってしまった手前このソロダンスで彼女に負けるわけにはいかないのだけれど、これはちよつと分が悪い。

しかも緊張はさつきから収まる様子もない。

はわわわ、ど、どうしよう。

「ヘイ！ お次はエントリーナンバー34！ ロッシーナ・パサモントだ！」

「へ！？ も、もう僕の番なの？ って、ぎゃあ！！」

舞台の中央に出ようとすると、タイミング悪く足を纏れさせてすつ転んでしまった。

会場からは失笑が漏れる。

「ヘイヘイ！ お嬢ちゃん大丈夫かい、こんなところでこけちゃダンスどころじゃないんじゃないの？」

「い、いえ大丈夫です。ちゃんと踊れます！」

とにかく僕は踊り始めた。

踊りながら観客席を見渡すけれども、みんなの関心はもうドルサナ嬢に持っていていかれてしまっている。

この広い会場の中で僕以外の全員が僕の敵のような、みんなに冷笑を浴びせられているような、そんな錯覚を感じた。

歓声も、拍手も無い中、僕はただ音楽に合わせて踊るしかなかった。

この孤独感の中、暗闇を彷徨うように僕は踊り続ける。

そんな中、一瞬だけ観客席で僕を応援してくれる人たちを見た。旦那に奥さん、クソガキたち、それに先生だ。

みんなの笑顔が僕の網膜に焼きついた。

ああ、そうかドルサナ嬢には負けたくないだとか、月花美人だとかは本当はどうでもいいことだったんだ。

みんなのために、先生のために踊りたい、それだけなんだ。

そう考えると世界が急に明るくなった。

孤独感も暗闇も消え去って、僕はみんながいる明るい世界で踊る。僕の全てを出し切って全力で踊る。一心不乱に踊る。

ライトに照らされるキラキラと輝く汗は宝石のように輝き、舞台に落ちる僕の影は敏捷に動き出す。

シューズは舞台をこすり、軽快な音楽に合わせてリズムを刻む。

音楽が止み、僕のダンスが終わると舞台には沈黙が訪れた。

額からこぼれる汗が足元にポタポタと落ちて黒い染みをつくる。

もうやりつくしたから僕はこれで満足さ。

僕は花娘の円に戻ろうとした。

その時、会場のおちこちでまばらな拍手が起こった。

すると拍手の音はすぐに大きくなり、会場は耳が痛くなるくらいの拍手と歓声で満たされた。

僕が観客の方を見渡すとみんな笑顔で僕の名前を呼んでいる。

先生や旦那も今まで以上に喜んでるようだった。

「み、みんな」

目から涙がこぼれそうで、僕は潤んだ目をこすりながら花娘の円に戻った。

\*

「さて、素晴らしいダンスをありがとう！ 今宵の花娘たちにもう一度盛大な拍手う！」

花娘のダンスは終わり、会場は再び拍手で満たされた。僕たちは一列になって舞台に並んでいる。

え？ 踊りは終わったのにどうして僕たち花娘がまだ舞台に残っているんだって？

それはね……。

「さてさて！ それではいよいよ今年の月花美人の発表だあ！」

司会が再び勢いよく叫ぶとドラムロールが始まって、スポットライトが花娘の頭上をいったりきたりし始めた。

「なな、なんと！ 今年の月花美人は彼女だあ！！！」

照明がパツと消え、ドラムロールが鳴り止んだ。

だけど、次の瞬間聞いたことも無い轟音が村中に響き渡り、地響きが起こった。

そして東の空が真っ赤に染まった。

「なな、何なんだよ一体い！ こんなの台本には……！」

真っ赤に照らされた東の空を見て、司会は声を失った。

もちろん司会だけじゃなく、僕も他の花娘たちも観客たちもその光景を前に一言も声が出せなかった。

東の空が真っ赤に染まっていたのはそこにあったはずの大風車が燃えていたからだだった。

しかも大風車は跡形も無く崩れ去り、燃え盛る残骸を残すだけだった。

そんなことよりも僕の目を疑ったのは崩れ去った大風車の代わりにそこにそびえ立っているものだった。

「う、嘘だ」

それは夢のような光景だった。もちろん悪夢だけど。

そう、まるで悪夢みただけけど、一匹の竜がまるで月花祭の終焉を告げるかのようにそびえ立っているんだ。

## 第十話「竜と兵士」

黒光りする深緑色の鱗、ギラギラと淀んで光る真紅の瞳、黄味がかった鋭い牙。

その巨大な魔物は夜空に向かって大地を震わせるがごとき咆哮をした。

その轟音に僕はすぐさま耳を塞いだ。その瞬間、近所の家々の窓ガラスは全てに罫が入った。

巨大な魔物の周りに散らばっている大風車の残骸は赤々と燃えていた。火元が何であったのかはこの後すぐにわかることになる。

巨大な魔物はその大きな口を広げて自分の周りに立つ残りの風車に思い切り息を吹きかけた。魔物の吐息は灼熱の炎へと変わり、大風車の周りにそびえ立っていた十数個の風車を焼き尽くしてしまった。

突然起こった不可思議と驚異を前についさつきまで村人は誰一人として声を出せないでいたが、燃え上がる風車と竜の火の息を目の当たりにした彼らは耳が痛くなるほどの悲鳴を上げて一斉にその場から逃げようと走り出した。

他人を突き飛ばす者もあれば、我が子を抱きしめて神の名をひたすら叫ぶ母親の姿もあった。

竜の咆哮や逃げ惑う人々の悲鳴、燃え上がる風車の爆音で騒然となった中央広場はもはや秩序と言うものを失っていた。

「これは酷い……」

僕はこの無秩序を前に吐き気を催し、その場に崩れ落ちた。

何でこうなったんだ。

月花祭に出て、ちよっと苦しくなって、それでも最後は楽しくて

明るくて。

なのに竜が現れて全てを破壊していった。  
何でだよ、何でこんなことになったんだよ。

「そうだ、先生。先生は？」

辺りを見渡して先生の姿を探す。

だけど逃げ惑う人の波が大きすぎて、先生の姿を見つけることは出来そうにない。

そんな中、人混みの向こうの方で先生らしき人影が見えた。

「先生！」

僕は人の流れに逆らって走った、先生がいた方向に向かって必死に走った。

走りながらもたくさんの人の叫び声や悲鳴が聞こえてきて、僕は手で耳を覆って走った。

すると耳を塞いでいるにも関わらずドオンという大きな音が聞こえてきた。

見ると僕は竜のかなり近くまで来てしまったみたいで、竜の周りでは村の自警団の人たちが剣や槍を持って竜に対峙していた。

竜から少し離れたには大砲があって、おそらくさっきの大きな音はこの大砲だったんだろう。

「貴様ら！ 炎には気をつける！ 二度目の援護射撃の後、槍隊が突撃だ！」

「サー、イエツサー！！！」

大砲の横で剣を振るって自警団を指揮しているのはあのと時の変質者、ハイネのようだった。

そのハイネの怒号に兵たちも大声で返す。

「次は頭だ、よく狙え！ 援護射撃、第二撃発射！」  
ハイネが剣を振り下ろすと数機の大砲が一斉に火を吹いた。  
打ち出された砲弾は竜の頭に見事命中し砲煙が竜の頭上でモクモクと上がり、竜は苦悶の声を上げた。

「よし！ 怯むな、槍隊進撃！」

槍を持った自警兵たちが一斉に竜に突撃する。

鋭く光る槍の切っ先を竜に目がけて思い切り突き刺す。

だけど、その暗緑色の鱗は鉄のように固く、ほとんどの槍は跳ね返され、半数以上の槍が折れ曲がってしまった。

さらに悪いことに、竜の頭上を渦巻いていた砲煙が風でかき消され、驚異的な現実を目の当たりにすることになる。

「な、何だと。あの砲撃で傷一つないなんて……」

叫ぶハイネの目線の先には傷一つついていない竜の顔があった。

あの爆撃に対して曇りすらない、その鈍く光る鱗は竜の怖ろしいまでの頑丈さを物語っていた。

そして竜は火を吹いた。

全てを燃やし尽す業火から自警団は必死に避けようとする。

砲台も槍も投げ捨てて自警団はあちらこちらに霧散する。

決して自警団が腰抜けなのではない。竜が圧倒的に強すぎるのだ。

竜の炎から距離を取りつつ反撃の機会を伺っていたハイネは、木陰に潜んでいた僕に気が付き僕の方に駆け足で近付いてきた。

「貴様あ、何をしている！」

「え、な、何って……」

「ふんっ、まさかこの竜も貴様が呼び寄せたんじゃないだろうな」

「そ、そんなこと……」

「まあ、いい。今はこの竜を何とかすることが先決だからな」

そう言つてハイネは竜の方に視線を戻す。  
竜は勢い衰えることなく依然としてその猛威を奮っていた。  
魔物が壊す、全てを壊す。僕らの村を破壊する。

「おい小娘。貴様、魔法は使えないのか」

「え、ま、魔法？ 使えませんよ、そんなの」

「そうか……」

「魔法つて、何の話です？」

「ふつ、貴様の母親は優秀な戦士だった、魔法を使う戦士だ。だからお前ももしかしたらと思つたんだがな」

「母さんが……」

「まあ、そんなことはどうでもいい。魔法であの竜を殺すという線は無くなつたわけだ」

ハイネは腰の長剣に手をかけ、刀身を思い切り引き抜いた。

刀身は月明かりに照らされキラキラと冷たい輝きを放っていた。

「大砲は効かない、魔法は使えない。この圧倒的な戦力差を打開するのはただ一つ」

「な、何をやる気なんですか」

夜の闇を照らす淡い月の光ではハイネの表情は分からないけど、その声は返答はやけに落ち着いていた。

その落ち着いた声は僕の質問には答えずに、ただ一言だけ呟いて消えた。

「小娘、貴様は生きる」

その一言を発するとハイネは長剣片手に竜の方へ駆けて行った。

大声で二、三の命令を叫ぶと他の自警団も剣を抜き一斉に竜に向かって走った。

突貫だ。

竜の鱗は強固で刃物を全て拒むけれども、その鱗の隙間は刃先を容易に受け入れる。

だから竜の隙をついて、自警団はその一点を剣で思い切り突き刺す。

最も竜に近付くことになるこの作戦は余りに危険極まりない。

そんな危険を前にした自警団たちの頭に浮かぶのは死の恐怖だろ  
う。

だけど彼らは無謀とも言える勇敢さで突き進んで行った。

現時点で、この村を救うことが出来るのは彼らしかないのだ。

自警団の剣は次々と竜の体に突き刺さっていき、剣が深々と刺された傷口からは赤黒い血がドロドロと流れ出していた。

竜は手、脚、腹を駆け廻る激痛に悲鳴のような咆哮を上げた。

しかし自警団の手は緩むことなく、次々と竜の体に剣を刺し、その肉により深く喰い込ませた。

ハイネら数人の自警団は竜の胸を駆け上がってその首の付け根にまでその剣を突き刺した。

竜も苦し紛れに火を吐くけど、見当違いの方向に吹かれたその炎では自警団に大きな被害を与えることは出来なかった。

その上、その巨体のせいで動きはひどく鈍く、怒りにまかせて地団太のように振り下ろされた足を死を覚悟した戦士避けられないわけがなかった。

自警団の必死で執拗な攻撃に竜は劣勢となり、もう自警団の勝利は目に見ても明らかだった。

だけど次の瞬間、僕の目の前から自警団の人たちは消え去った。

一瞬の出来事だった。

竜はその長く重い首を振り子のようにして空間を切り裂いた。丁度、自警団たちがいる、身体のすぐ傍の空間を。

竜の首は凄まじい勢いと速さで自警団に衝突し、彼らが避けよう  
と考えるよりも先にその重い首は彼らを吹き飛ばした。

衝撃、その一言に尽きた。

こうして事態は最悪の状況になった。

僕は恐怖で足がすくんでしまい、この場を逃げ出そうとしても足  
が一步も動かなかった。

「何をしてる！ 早く逃げろ！」

足をガクガクと震わせる僕に向かって誰かが叫んだ。

声のする方を向くとそこには立っているのもやっと思えるくら  
い傷ついたハイネがいた。

「早く逃げろ！」

ハイネの叫びに僕は返事をする事が出来なかった。歯はガチガ  
チと音を立て、恐怖に支配された僕は声が出なかった。

そんな僕を見て、ハイネは何も言わずに僕の傍まで歩み寄って血  
塗れの両腕で僕を強く抱きしめた。

「俺は、また助けられることが出来ないのか……」

ハイネは哀しそうな声で一人言のように呟いた。

何で彼がそんなことを言ったのかは分からないけれど、僕を抱き  
しめる彼の手の力強さから必死に僕を守ろうとしているのが伝わっ  
てきた。

その手も血で黒くなっている。竜の血だけじゃなく、彼自身の血  
も混ざっているんだろう。

暖かな腕は僕の震えを止めるように優しく包み込んでいた。

僕はここで死んでしまっただろうか。

死を前にして頭に浮かんだのは先生の笑顔だった。

助けて、先生。助けて、先生。

目を瞑って必死に願った。

「ここにいたんですか、ロッシュ」

聞き慣れた声がして、ゆっくりと目を開いた。

開いた目の先には目を瞑ったままの背の高い人が、笑顔を向けて立っていた。

## 閑話02「昔語り…とある盲目の記憶」

「竜殺しのキファーン」という通り名で呼ばれ始めたのは、すでに私が第一線から退いていたときだった。

というのも視力を失った私は光の無い無限暗黒の中を数年もの間彷徨っており、魔物を倒して武名を挙げることなど到底不可能だったからだ。

さて、その「竜殺し」と言う通り名は、私の両目から光が消えたことと少なからず関係しているのだが、その経緯を話すことにしよう。

「赤剣のキファーン」というのが私の元々の通り名で、私の歩いた後には血で赤い道が出来ると恐れられたものだ。

その当時、私は魔王討伐などと銘打って数人の仲間と一緒に魔王城を目指していたのだが、ちょっととした意見の衝突で仲間と喧嘩別れすることになってしまった。

今からすれば信じられないくらい高慢な性格だった私は、そのまま群れを作ることなく一人あちこちを放浪していた。

用心棒や賞金稼ぎ、魔物狩りのようなことをするその日暮らしの生活をしてきたが、どれもこれも私にとっては退屈極まりないものだった。

自分より強い者を探すも、どんな戦士も魔物も私の剣を赤く染める程度でしかなかった。

そんな私があるとある山奥の名も知らぬ集落を訪れたのは偶然などではなかっただろう。

そこでは祭の準備がされ、人々が忙しなく働いていたのだがその表情にはいささかの活気も見られなかった。

私はその村人の一人を捕まえて何事かと聞いてみた。

「おい、この騒ぎは一体何の騒ぎだ」

「へえ、竜神様の祭の準備ですじゃ」

「ほお、祭か。しかし祭にしては暗すぎるようだが。ほら、あそこには泣いている者もいる」

私が指を指した先にはさめざめと涙を流す集団があった。

その群れの真中には若い娘がいて、その目を真っ赤に腫らしていた。

「あれは生贄の家じゃろうて。じゃから悲しゅうて泣いとるんじゃ  
「生贄だと？」

「はあ、竜神様に生娘の生贄を捧げるのがこの村の慣わしじゃて  
「ちよつと待て、その『竜神様』ってのは一体何者なんだ」

「竜神様はワシらの村の守り神じゃ。三百年も前からワシらは竜神  
様に村を守つて貰うために季節に一度、生贄を捧げるんじゃ」

「生贄にやられた娘さんはどうなるんだい」  
「湖の底で竜神様の供御、つまり食べられるわけじゃ」

その年老いた村人は一人の若い娘が死ぬと言うのにさらりとそんなことを言った。私の目には彼が狂人のようにも見えたが、これがこの村では普通の反応なのだろう。

「ふうん。で、アンタはその竜神様つてのを見たことがあるのかい  
？」

「滅相もねえ。竜神様を見たら目が潰れてしもつわい」

「あ、そう。じゃあな、邪魔して悪かったな爺さん」

私は老人の下を離れ、どこか手頃な宿屋に入って身を休めた。

宿屋のベッドの上で、私は苛立ちと呆れに似た感情を持って天井をじつと眺めていた。

竜神だの生贄だの実に馬鹿馬鹿しい。こんなどこにでもある昔話に出てくるような風習が現代に残っているとはお笑い草だ。

こんな習俗は到底、文明人のそれとは思えない。

竜神なんてものはどうせ人々の恐怖心が作り上げた幻想に過ぎないだろうし、もし本当に存在するにしてもそいつは低俗な魔物で、狩る側の人間様からしてみれば狩られる側の存在だ。

そんなものに恐れ、命までも捧げるなんてのは馬鹿げている。

私の閉じた瞼の裏には昼間見た生贄の娘の泣き顔が映った。美しい娘だった。

その娘の白い肌の上を一筋の涙が流れ落ちるのを見て、私は同情とは別の感情が胸の奥でぐらぐらと湧きあがっているのを確かに感じた。

「行くか」

今にも壊れそうなベッドを軋ませながら起き上がり、私はそんなことを呟いた。

時刻はもうすぐ明け方と言う頃で、私は宿屋の使用人を叩き起し、とある場所への道案内をさせた。

村外れの森に足を踏み入れ、どんどん進んでいくと次第に足元が暗くなっていくのが分かる。

松明で足元を照らしながら鬱蒼と茂る深い森をかきわけ進む。

もう日が昇っただろうと言うのにこの森の中は夜のように暗い。

今にもそこらの暗がりから何か飛び出てきそうので、目の前を歩く使用人の背中がびくびくと震えていた。

「旦那あ、あつしはもうこれ以上進めませんや」

「どうした、道がわからなくなったのか」

「いんや、そうじゃねえや。他所者をあそこまで案内したなんて知られたら、あつしの命がありませんや」

「そうか。よし、わかった。ここから先は私一人で行く」

「すいやせん、旦那。後はこのままずっと真つ直ぐ行きや湖に着きますすけえ」

「わかった、案内御苦労。これは礼だ」

俺は金貨の入った小袋を使用人に投げ渡した。

「へ、こんなにもいいんですかい」

「ああ、ほんの気持ちだ」

「ありがてえや。それにしても旦那、竜神様の湖に一体何の用で？」

「ふむ、まあ見物みたいなものだ」

「はあ、変わってますなあ。ま、くれぐれも竜神様のお怒りを買うようなことはやめて下さいよ」

「ああ、わかってるさ」

そう言っつて、俺は使用人と別れそのまま道を真っ直ぐ進んだ。振り返ると使用人の姿はもう見えなかった。

使用人と別れてからかなりの時間が経過した。ずっと歩き続けるが目的の湖はまだ見えてこない。

途中で何度もこの道で本当に合っているのかと思ったりもしたが、とりあえず進み続けた。

足場の悪い上り坂に差し掛かり、滑り落ちないようにぐいぐいと坂を上る。

坂を登りきると辺りが急に明るくなり、その明るさに目が眩んでしまった。

暗い森から明るみに引つ張り出されて眩む目は次第にその明るさにも馴れ、その景色を鮮明に映し出すことが出来た。

空を見上げると、先ほどまで光を遮っていたは厚い木々の枝は姿を消し、青い空が姿を見せていた。

明朗な太陽の光と穏やかな緑の木漏れ日が差し込むその先には、緑白色の曇り無い湖が広がっていた。

「ここか……」

神秘的とも言えるその湖には何か主のようなものが棲んでいてもおかしくは無いような雰囲気を持っていた。

私は腰に構えていた長剣を抜いた。太陽の光がキラリと刀身を光らせ、反射した光は湖を照らした。

「さあ、出てこい。竜神様とやら！」

私は剣を構えて、湖にそう叫んだ。

しかし叫び声は辺りの岩壁に反響するか、森の中に吸い込まれるかしかなく、最後には虚しい沈黙が流れるだけだった。

「いないのか……」

湖は静けさが支配していた。そこにいる生き物はまるで私一人であるかのような、そんな静寂があたりを包んでいた。

「仕方が無い。生贄が連れてこられたときに娘を助けるか。それまでここらに隠れて……」

私が剣を収め、そこらの草むらに身を隠そうとしたそのとき、背後の湖からゴボゴボと何かが湧き上がるような音がした。

私が振り向くと、そこには真っ白な一匹の巨大な竜がじっと佇んでいたのだった。

白い。

私の目の前にいたその大きな生き物は白かった。

乳白色の鱗と所々に藻で染まった緑色。青緑色のたてがみに、真紅の瞳。

そして、湖面のような静けさを感じさせる。

昔話に出てくるような暗緑色で荒々しい竜とはかなり異なるが、そんな知識が無くとも目の前のそれは本当に竜だった。

その姿は確かに神と名乗るのに相応しいほどの高貴さを持っている。私はしばらくの間、その美しさに見とれて声を出すことを忘れていた。

「って、クソツ！ 危なかった、意識が完全に飛んでしまった」

完全に竜の美しさの虜になっていた俺は正気を取り戻し、再び剣を抜き竜に向かって構えた。

「おい、竜神だか何だか知らないがよく聞けよ」

俺の声が聞こえているのか、白い竜は俺の方をじっと見つめてい

る。

「貴様が生贄など欲するせいで、罪なき村人が涙を流している」

白い竜は吠えるでもなく頷くでもなく、ただただその紅い瞳で私を見つめ続けていた。

私は剣を振るって、声をさらに大きくする。

「今、私はこの負の鎖を断ち切るべきだと思う」

剣に反射した光が眩しいのか竜はその目を細めた。

「だから……貴様は私がこの手で殺す」

私はそう言い終わるや否や、即座に竜に切りかかった。

竜がまた湖の奥深く沈んでしまつてはもう手も足も出せない。だから竜が湖に隠れる前に全てを終わらさなければならぬ。

つまり、勝負は一瞬。

私は全速力で駆け込み、竜の懐へ入り込んだ。

そして、思い切り剣を振り下ろし竜の首を一直線に切り裂いた。

鮮血が吹き出て、返り血が私の体を真っ赤に染め上げた。そのはずだった。

私が剣を振り下ろした先には何も無く、ただ緑色の濃い雑草が地表を埋めているだけだった。

私が斬つたものは虚空だった。

わけがわからない。

あの白い竜は確かに、さっきまでここ、この剣の先にいた。

それなのに剣がその身に喰い込む前に竜はこの場から消えていたのだ。

私は左右を見渡すが竜の姿は見当たらない。湖の中に逃げ込んだのかと思って、湖を覗き込むが波紋の一つも無かった。

だが、その凪いだ湖に薄暗い影が出来ているのに気付く。

そのまま視線を上に向けると、そこにあつた。両翼を広げた白い

竜の姿が。

「貴様、飛べるのか……」

空の上から私を見下ろすそれは、太陽の光を背に、くもりガラスのような翼を広げて飛んでいた。

さて、空を飛ばれるのは厄介だ。

無論、私も怪鳥や大蝙蝠など空を飛ぶ魔物との戦闘経験が無いわけではない。

しかし、今は弓も無ければ槍も無い。飛び道具が無い上に、その飛んでいる竜の真下は底の見えぬ湖である。

こちらの岸におびき寄せない限りは到底勝ち目はない。

『人間よ……』

私が必死で打開策を考えていると、どこからとも無く声が聞こえてきた。

「な、何だ？ 幻聴か」

辺りを見渡しても自分以外の人間はいない。

『我だ……お主の目の前にいる』

目の前、と言えば空に浮いている白い竜だけだ。

「もしかして貴様なのか？ この頭の中で響くような声は」

『左様、我だ……お主らが竜神と呼ぶものだ』

この白い竜と言うのは空が飛べる上に、言葉まで喋れる。これほどの常識外れな魔物を私は見たことが無い。

「喋れるんなら話は早いな。なあ、貴様、殺してやるからちょっと降りて来い」

『……お主はそんなに我のことが憎いのか』

「ああ、憎たらしいね。神を騙って好き放題やって、人間様の上に立って調子に乗ってる魔物が私は大嫌いだ」

『……確かに我は神ではないが……贅を欲するのは何ら問題はある

「まい？」

「は？」

竜はいまだに空の上で、私を見下ろしたまま声を頭の中に響かせている。

『……村人を守り、その対価に贅の命を貰う……実に道理に合った考え方である』

「貴様……」

『……贅と引き換えに村人は三百年にも及ぶ平安を手にしたのだ……我が死ねばその平安も消え去ってしまう』

「獣の分際でよく言うな。そんなことはまやかした、貴様が村人を搾取している限り本当の平安は訪れない」

逆光でよく分らないが、空の上にいる竜の表情が一瞬曇ったような気がした。

『……そもそも、お主は根本的なことが間違っている……人間が獣より上だと誰が決めたのだ』

「あ？ 俺たち人間は“狩る”側、お前たち魔物は“狩られる”側。そんなことは誰が見たって明らかかな世界の縮図だろうが」

『……そうだ、この世は強い者が弱い者を統べる……そうして世界は回っている』

「何が言いたい……」

『……つまり、人間より“強い”我が、人間どもの上に立ち、人間どもを搾取するのに何か問題があるのか、と言っておるのだ！』

突然、頭の中で竜の叫び声がガンガンと鳴り響いたと思ったら、空を飛んでいた竜は一瞬にして姿を消していた。

すると、目の前に鈍い光を放つ刃が不意に現れたのだった。

私は咄嗟に身体を後ろに捻り、その襲い来る刃から身を反らした。

距離を置いてよく見るとその刃のようなものは白い竜の爪だった。ああ、そうか。竜は一瞬で私の前まで接近し、そこからその鋭い

爪で私を八つ裂きにしようとした、そういうことだったのか。

今さらだ、今さらだがこの竜は強い。今まで私が遭遇したどんな魔物よりも強いのは確かだ。

竜の攻撃は私の目では捉えられない。圧倒的な力の差、それを今、ひしひしと感じている。

それなのに、それなのに……。

「それなのに、どうしてこんなにワクワクするんだろうな？」

「……痴れ者め、知ったことか！」

風を切る音が聞こえた。それだけが聞こえた。竜がどうやって移動したのか、どのタイミングで攻撃してくるのか全く分からない。

「だが、それが面白い」

「……お主、私の攻撃が見えていたのか？」

竜の背中からはダラダラと鮮やかな赤い血が流れていた。私の剣はその血と同じ色に染まっていた。

真っ赤な剣の先には先程まで竜の背中についていた、白い翼がごろんと転がっているだけだった。

「貴様の攻撃なんて見えないさ。ただ、私のすぐ近くまで来る、ってことだけはわかっていたからね」

「……なるほど、我がお主に接近した時の一瞬の隙について、そのまま私の翼を斬り落としたと言うのか」

「ま、そういうことだ。さ、飛べない竜なんてただ図体がデカイだけの獣だからな。次こそは本当に殺してやるよ」

「……フツ、甘いな……そして、お主は我を本当に怒らせたようだ」  
竜は不敵な笑みを浮かべ、私をじっと見つめる。

次の瞬間、竜の口から白い光のようなものが放たれた。危険を察知した私は間一髪でその光線を避け、草むらの上を転がった。

光が放たれた先を見てみると、そこにあったはずの木が、草が、岩が、一切合財無くなっている。焼け焦げたとか、叩き壊されたとかそんなのではなく、本当にキレイさっぱり消えてしまったのだ。

驚異的な破壊力、と言うしかなかった。

竜はさつきから一言も喋ろうとはせず、依然として不敵な笑みを浮かべたままだった。

正直なところ、私の手足は震えていた。握る剣までがカタカタと音を鳴らすほど震えていた。

それはこの白い竜に対する恐怖によるものだろうか。圧倒的な力の差をまざまざと見せつけられたことによるものだろうか。いや、それは違う。

この震えは…… 歓喜の震えだ。

「そう、この震えは歓喜の震えだ。強い敵に出会えて、私は嬉しい」  
『…… 黙れ』

竜は次々と口から光を放つ。光線は十数本の線となり、森を、大地を、空間を消していった。

私はそれを避けていく。幾本の光線の軌道がまるで全て見えていくかのような感覚を覚えた。

時間が経てば経つほど、光線避ければ避けるほど、その感覚はより鋭敏なものになっていった。

体中を駆け巡るゾクゾクとした感覚。喜びに悶えるような歓喜が私の体を支配する。

目の前の強敵、私が今まで待ち望んでいた強敵と戦う喜びが、私の能力をぐいぐいと引き上げていく。

私の心の内側に眠る生存本能が呼び覚まされ、五感の全てが研ぎ澄まされた。

私の身体の内側に眠る闘争本能が呼び起こされ、前身の筋肉が最大限の力を発揮する。

竜の口から発せられる光は、もう私の目にはゆっくりとした線にしか見えなくなってしまうた。

私はその光より速く走ることができ、竜の振る鋭利な爪など全て

へし折ってしまった。

力が臨界値に達した時、私は竜の懷に潜り込み、劍を大きく振り上げ風を斬った。

「貴様のおかげで力を得た。ありがとう、そして……」

振り下ろした劍は竜の白き喉元を堅固な鱗もろとも斬り裂いた。

「あばよ」

竜の首と胴体は永遠に切り離された。劍も衝撃に耐えきれず真っ二つに折れた。

上から血の雨が降り注いだ。私の服も、手も、顔も全てが真っ赤だった。

「ははは、あははは」

笑っていた。血みどろの中、私は笑っていた。

どうして笑っていたのか、それは今でもわからない。

竜神を殺したからか、村娘の命を救ったからか、それとも今まで以上の“力”を手に入れたからか。

答えはどれでもない。

ただ一つ言えるのは、この上なく愉快だったと言うことだけだ。

『……やはり、お主は狂人だったようだの』

頭の中にまたあの声が響いてくる。だが、今度は声も随分弱々しくなっている。

「なんだ、まだ死んでなかったのか」

『……心配せんでも、我はすぐに逝く……だが、我の命を奪い、“力”を手にしたお主にはそれなりの対価を払って貰わねばならぬ』

「対価だと？」

『……フツ、なに、すぐにわか……』

竜神の声は私の頭の中から余韻すらも残さずに、消えていった。そして次の瞬間、私は闇に包まれ、意識を失った。

気が付いた時には辺りが騒がしかった。「村の守り神が殺された」「竜神様の祟りが起こる」「もうこの村はダメだ」などという悲鳴じみた声が聞こえてくる。

このときすでに私の目は闇に閉ざされていた。聞くところによれば、竜神の血と一緒に呪いまで浴びてしまったようだ。

諸悪の根源である竜神を殺した私を誉め讃えるでもなく、村人たちは私に「悪魔」「呪われ人」などと罵声を浴びせた。

目の見えない私を介抱するでもなく、村人たちは私を滅多打ちにした。

そうして私は村人たちから恨まれるようにして村から追い出された。

そのまま私は光が一切ない世界を杖を片手に当てもなく放浪した。風の噂によれば、あの村はあれからひと月もしないうちに全滅したそうだ。

それも外敵に滅ぼされたのではなく、村人全員が湖に身を投げ、自ら命を絶つたらしい。

確かにあの“竜神”は本物の“竜神”だった。

だが、村人たちが信じていたのはあの“竜神”では無かった。それは自分たちの恐怖が生み出した幻想で、さらにその恐怖から逃れる拠り所となるのもまた、その幻想であった。

私が本当に殺したのはそんな幻想だったんだ。

今でも時々、あの鋭く響く竜の声が頭の中で響く日がある。

あの時、私は全てを自分の思い通りにやろうとした。だが、結局は全てを失ったのだった。

## 第十一話「先生と竜」

赤々と燃える風車の明かりに照らされるのは、杖を手にして竜の前で仁王立ちをする一人の盲目男だった。

「先生！ 今までどこにいたのさ!？」

「いえ、ロツシュ。みんながやけにやかましいから音を頼りにね。それにしても何ですかこの騒ぎは？ うるさいし、それに妙に暑い風車火事ですか？」

「先生！ 冗談なんていいから、あれ竜だよ！」

「ふふ、冗談が過ぎるのはロツシュの方ですよ。竜なんて幻想の産物です、人の恐怖心が生んだ魔物なんですよ」

先生の顔色は少しも変わってない。本当にこの騒ぎが風車火事であると信じているかのような口ぶりだ。

「どうせ大風車が火事になって誰も手がつけられないってところですかね」

僕は呆れてものが言えなかった。

さっきの人々が逃げ惑う阿鼻叫喚の声や竜の嘶きを確かに聞いたはずなのに、どうして先生はこうも飄々としていられるのだろうか。どうにも先生はそこに竜がいるという事実を認めたららないように見える。

何がそうまでして先生の意志を固くするのだろうか。僕には見当もつかない。

「おい、盲目。馬鹿なことを言っていないで、この小娘を連れてさっさと逃げろ」

「おや、その声はハイネさんですか。何だか声に元気がありませんが。まあ、火事を何とかしようとして失敗したってところですかね」「き、貴様!！」

「まあ、あなたたちはそこでゆっくりと休んでいて下さい。アレは私がおとしますから」

そう言うと先生は杖を片手に、竜の方へ向かって行った。

「おい、やめろ！ 盲目の貴様がどうにかできるもんじゃない！ 死にたいのか！」

「先生！」

僕らの叫びに少しも振り向かず、先生はただ前進するだけだった。「まったく、あの盲目は正気なのか」

「わからない、わからないけど……」

わからないけど、先生なら何とかしてくれる、そんな気がする。

走るでもなく、立ち止まるでもなく先生はスタスタと竜に向かって歩いて行く。

その無謀な戦士に気づいた竜は、またその口から赤々とした炎を吐く。

だけど、先生はそんなことも気にせず歩き続ける。

驚いたことに竜の炎は先生の衣服を焦がすことすらできず、まるで炎が先生を避けているようだった。

先生が見えないながら意図的に炎を避けているのか、単なる偶然なのかはわからない。

だけど、僕の目には先生がその炎の行き先を全て把握しているような、そんな感じがするくらい自然に先生は進んで行く。

炎も一切当たらず、どんどん自分の方に進み行く一人の人間に竜は恐怖や驚異を抱いたのか、突然暴れ出した。首を振り、地響きを起こし、天高く咆哮した。

それでも先生は竜に近付き、暴れる竜の隙をついて竜の懐に潜り込んだ。自警団が刺した槍を足場にして、その竜の揺れる巨体を軽々と登った。

そして足場の悪い中、杖を大きく振りかぶってその鋭い先端部を竜の喉元に付き立てた。巨体を走る痛みの衝撃に竜は身体を悶えさせさらに暴れまわるけれど、先生は杖をずぶりずぶりど竜の喉元に押し込んでいく。

その深々と突き刺さった杖を足場にして、先生は竜の首をさつと駆け上がった。

ここまでの先生の動きにはまったくの無駄も無く、まるで順調にいくのが当然だと言わんばかりのスムーズさだ。普段から目が見えないことが嘘ではないかと思えるぐらい先生は活動的だけど、今の先生は

普段のそれ以上に思えて仕方が無い。何が先生をここまで変えているのか。

先生が竜を幻想だと言い続ける理由も、先生の驚くべき身体能力の理由も同じところにあるんだろうか。

気が付けば先生はもう、暴れる竜の頭頂部まで登っていた。

懐から短剣を取り出した。それは薬草採取のときに持っていく短剣だった。短剣の刃はキラキラと歪に光り、その振り上げられた切っ先は竜のギラギラと鈍く光る目に向かって一直線に進んでいく。

次の瞬間、天を地を引き裂くような悲鳴じみた咆哮が辺り一帯に響き渡った。

見ると、短剣は竜の眼に突き刺さり、血の涙を流して泣き叫ぶ竜の姿がそこにはあった。

「何て奴だ……。あの盲目野郎、あんなにあつさり竜を……」

ハイネは驚きの表情でポカンとその様子を眺めていた。

本当にすごい。このまま先生なら本当に竜を倒すことが出来るんじゃないだろうか。

僕はただ畏敬と期待の目で先生を見つめていた。

「あ」

だけど、再び竜が暴れた。今度という今度は尋常じゃない暴れ方で、その足元には地割れのひびが何本も入り込んでいる。

その激しい揺れに耐えられなくなったのか、それともたまたま足を滑らしてしまっただけなのかは知らないけど、真つ逆さまに落ちていった。先生は竜の頭から真つ逆さまに滑り落ちた。

「いやああああ!!」

僕の叫びが空気を震わせる。

そんな、嘘でしょ。先生が、先生が。ダメだ、駄目だよ、そんなの。

誰か、助けて、先生を助けて。

僕は眼を閉じて、ガラスが割れるような悲鳴を上げ続けた。

助けてよ、誰か、先生を助けてよ。

先生が死んじゃうなんて、そんなのダメだよ、イヤだよ。

イヤだよ。死なないで、先生!

先生はものすごい勢いで、真つ逆さまに落ちていく。頭から地面に叩きつけられて、そう、身体がグチャツと音を……立てなかった。むしろ世界は急に静かになった。竜の咆哮も聞こえなかったし、後ろにいるハインの声も聞こえなかった。

おかしい。何が起きたんだろう。

僕は恐る恐る閉じていた眼を開けた。

僕は声を失った。

僕が見たのは無残に散った先生の死体でも、真新しい血に濡れた大地でも無かった。地面の上には先生はいなかった。

視線を少し上げれば、そこに先生がいた。

宙に浮いて、そのまま静止していた。僕は眼を疑ったけど、それは確かに現実だった。

「な、何だ、これは……。俺は夢でも見ているのか……」

ハイネがそんなことを漏らす。無理もない、人間が浮くなんて魔法でもない限り不可能だ。

「これは、あれか、あの盲目野郎の能力が何かなのか」

「わ、わかんない、でも……」

見ると、当の本人も呆気にとられているように見える。竜も同じく、その宙に浮く奇妙な生き物を前にポカンと口を開けて黙りこくっている。

先生でも無い、竜でも無い。じゃあ、一体なんでこんな魔法みたいなことが。

魔法……みたいなの？

僕はハイネが言った言葉を思い出した。僕の母さんは魔法を使う戦士だったって。

確かにあのとき、僕は必死に先生が落ちないように祈った。でもね、そんなまさか。

ハイネも竜も先生も状況が理解できずに呆然としている。

と、とにかく、今はチャンスじゃないか。今なら竜を倒せる。

「先生！ 今だよっ！」

僕がそう叫んだあと、先生は僕の方を向いて笑顔を見せてそのまま竜の方に手を伸ばした。

先生が丁度手を伸ばしたところには、さっきハイネが突撃した時の剣が突き刺さっていて先生はそれを思い切り引き抜いた。

傷口からはドス黒い血がドロドロと流れ出す。竜も痛みにも気付いたのかまた騒ぎだし、地鳴りを響かせ、火を吹いた。

炎は全く見当外れのところに舞い散り、空中に浮いたままの先生は剣の握り心地をゆっくりと確かめる。

空中に浮いていても足場と言うものはあるようで、ぐらぐら揺れる竜の巨体の上に比べたらはるかに足元がしっかりとしているみた

いだ。

立ち上がった先生は、血に塗れた剣をゆっくり静かに振り上げた。そして一気に振り下ろす。風を斬る音が僕の耳に届いた。

長剣は竜の首に食い込み、そのまま吸い込まれるようにして肉を深く斬る。

ずいずいと刃先は進み、皮を斬り、肉を斬った。

そして切っ先が再び空気に触れた。

断末魔のような竜の咆哮と、泉のように吹き出る真っ赤な血が夜の闇を染めた。

夜の魔物は鈍い音を立てて、大地に崩れ落ちていった。

グラグラと音を立てて揺れる大地はまるで悪夢の終わりを告げているかのようだった。

## 第十二話「祭のあととサングラス」

先生が目を覚ましたのはあれから一日経った夕暮れ時だった。

「せ、先生！」

僕は少し涙目になって先生に抱きついた。

「やあ、おはようございます。ロツシュ」

先生はベッドから起き上がり、うすぼんやりとした顔でそんなことを言う。

「おはようじゃないよ！ あの後、先生ずっと目を覚まさないままだったんだよ」

僕は先生の胸元にぼすぼすと握りこぶしを当てる。涙がじわじわと溢れてくる。

「もつずつと眠ったままなんじゃないかって、僕、ぼく……」

「………すみません。心配かけちゃいましたね」

先生はそう言うと僕の目元からこぼれる涙の雫を指でそっと拭いてくれる。

「私はもうどこにも行きませんか、泣かないで下さい。ね？」

「う、うん」

先生の優しく響く声で少しは気持ちが落ち着いてきた。

あれ？ でも、ちょっと待ってよ。何か違和感が。

「あのさ、先生」

「なんででしょう」

「何で、僕が泣いてるってわかったのさ？」

「それは、ロツシュが目には涙浮かべてるのが見え………え？」

「そ、それって、も、もしかして……」

「え、ええ、そのもしかしてかもしれません。見えます、私の手もロツシュの顔も、窓に映る秋の景色も。全部………見えます」

先生は驚いた。僕も驚いた。

こんなことがあるのだろうか、先生の目が見えるようになるなん

て。

見えるようになったのはどうやら片目だけらしいけど、それでも  
凄いことだと僕は思う。

「ところでロツシュ、昨日の騒ぎはあれからどうなったんですか」

「うん、あれから先生は地面の上に倒れてただけで、血まみれに  
なつて洗い落とすのが大変だったんだから」

「血？」

「竜の返り血だよ、先生はほとんど怪我してないみたいだから……

あ

そう言えば、先生はまだ竜のこと信じてないんだっけ。でも、先  
生にもいい加減現実を見つめて貰った方がいいよね。

「あ、あのね、先生。先生は竜のこと信じてないみたいだけどね、  
竜は本当に……」

「わかつてますよ、ロツシュ。竜はいますよ」

「へ？」

先生のおつさりとした肯定に正直拍子抜けしてしまった。

「な、何でそんなにあつさり」

「いえ。光を取り戻すと、幻想に溺れてたのは私の方だったんだな  
ってわかつたんですよ」

「ごめん、さっぱりわかんないんだけど」

「あははは。落ち着いたら、そのうち全てを話しますよ」

先生はそう言つて、僕が剥いたリンゴをシャクシャクと食べ始め  
る。

そして独り言をぼそりと呟いた。

「返り血か。その血のせいで呪いが解けたのかもしれませんね」

「え？ どういうこと」

「まあ、この話もまたいつか話すことにしますよ」

夕暮れ時の真っ赤な太陽が部屋を赤く染める。

「それにしても、このベッドは普段よりずいぶん柔らかいようですが」

「ああ、ここ村長邸だから」

「え」

先生は状況が分からず、また当惑の表情を浮かべている。

「あれから、僕とハイネは倒れた先生をこの屋敷まで運んだんだよ。あと、お医者さんにも見せたし」

「ああ、なるほど。そういうことですか」

「そう。それから隣の管制局がやってきて竜の死骸とか色々な処理してるみたいだよ」

「管制局が？」

「うん、やっぱり竜とか珍しいからそれなりの機関が事後処理するんじゃないの」

「そんなもんなんですかね」

先生はベッドの上に仰向けになって、天井を見つめる。

するとドアがガチャリと開いて誰かが入って来た。ドアの向こうには老人と体格の良い男の二人が立っていた。

「失礼するよ」

「その声は村長さんですか。お久しぶりです」

「ああ。どうだね、身体の調子は」

「ええ、もう何ともありませんよ」

先生と話す老人はこの村の村長だ。つまり、僕のお爺様に当たるわけなんだけど、直接会って話したこととかないからそんなに「お爺様」って感じじゃない。

すると村長は先生に向かって頭を下げ始めた。

「ちょ、村長さん。何ですか、急に」

「キファーノ君、ありがとう。君がいなかったらこの村は竜のせいで消えて無くなっていただろう。そして……」

村長は続いて僕の方を向いて、頭を下げた。

「ロツシユ、すまなかつた」

「え」

頭を下げる村長の目からは大粒の涙がボロボロと流れていた。

「はじめは、お前の身を魔物から守るために旅人だったキファーノ君に預けたんじゃ」

涙がよく蓄えられた村長の白い髭を濡らした。

「あの村外れなら魔物も攻め込みにくい、そう思ってたことだったが、結局お前を危険な目に遭わせてしまった」

白い髭から滴り落ちる涙の粒が床板に丸い跡をいくつもつける。

「お前がどんなに辛い状況にあつてもワシは救いの手を伸ばすことが出来なかつた。すまなかつた、本当にすまなかつた」

「もういいの、お爺様。もういいの」

僕の前で、子供のように涙を流す村長を見ると、知らないうちに僕も泣いていた。そして、気が付けば二人で抱き合っていた。

「ま、そんな危険な目も私が解決したんですから、万事上手く行つたつてことじゃないですかね」

先生が僕の頭を撫でながらそんなことを言う。僕とお爺様の顔に笑顔が戻った。

「キファーノ君、本当にありがとう。どんな礼を尽くしても礼をしきれんよ」

「あはは、そんな大袈裟な」

先生とお爺様が談笑しているところで、ずっと後ろの方で控えていた男がお爺様に歩み寄つて来た。

最初はこの屋敷の使用人かと思つたけれども、使用人にしてはずいぶん敵めしい恰好をしている。サングラスなんてしちゃつてさ。

「村長殿、そろそろこちらの話に移つてもよろしいかな」

「あ、ああ。ずいぶん待たせてすまなかつたね。キファーノ君、紹介しよう、管制局のサンソン君だ」

「どうも、サンソンです」

このサンソンが出てきてから部屋の空気ががらりと変わった。  
先生もこの管制局から来た男に明らかに不審そうな表情を見せている。

「どうも。で、管制局が私に何の用ですか」

「ええ、自分は回りくどい話は苦手ですので、単刀直入に言わせて貰います。キファーノ殿、あなたに魔王討伐をお願いしたい」

魔王討伐、サンソンの口から出たこの言葉は実に予想外なものだった。

「どうしてそんなことを私に頼むんですか」

「いえ、先日の竜騒動はほとんどあなた一人で片をつけたそうじゃないですか。竜の死骸を見てもあなたの腕が一流以上のものだったのは分かります」

「そんなことじゃない。今まで管制局は魔王に対して余りに無関心すぎた。それが今頃になって急に……」

そう、管制局は魔王が世に現れても、ボヤ程度にしか思わず何の対策も講じようとしなかった。そのせいで魔王の手は大陸全体に大きく広がってしまった。

そんな管制局が今さら魔王討伐を頼むなんて、変な話にも程がある。

だけど、サンソンは不敵な笑みを浮かべるだけだった。

「上層部の方針が変わったんですよ。魔王討伐はもう民間に任せたいられない、ってね」

「私が断ったらどうするんですか」

「いや、あなたは断らないさ」

サンソンのサングラスがキラリと光った。

「ふふ、管制局の計画では各自治体から一人ずつ魔王討伐の戦士を供出することになっている。あなたが断ったら他の村人が選ばれることになるんだろうが。どうだろう、現にあの竜騒ぎを解決できたのはあなた一人のようだし、あなた以外の村人が討伐兵に選ばれた

としても先は見えてるんじゃないのかな」

サンソンがそう言ったとき、先生の手は握り拳を作ってブルブルと震えていた。

「サンソンさん、あなたは卑怯な人ですね」

「卑怯も戦略の一つだよ。それに選ぶのあなただ。アロンソ・キフアーノ君」

沈黙が部屋を覆った。日はもう落ちて、まるで夜の闇が音を全て吸い込んでしまったようだった。

## 最終話「僕と先生」

夜の闇が僕たちに沈黙をもたらした。

ど、どうしよう、先生がイエスって言ったら先生はこの村から出て行っちゃうし、ノーって答えても別の誰かが出て行っちゃうんでしょ。

しかも先生以外の人だったら道中で魔物にやられちゃうってこともあるし。

あー、僕は一体どうすりゃいいのさ。

そして、沈黙を破ったのは先生だった。

「ふう。わかりました、やりますよ魔王討伐」

そう言う先生の顔はいつもと同じで眩しいほどの笑顔だった。

「ありがとう、あなたの英断のおかげで多くの人の命が救われるだろう」

サムソンが先生に右手を差し出し、握手を求める。

「ほ、ほんとうにやってくれるのかね、キファーノ君」

お爺様は当惑に満ちた表情で先生の下に駆け寄る。

「ええ、ここは私がやるしかないでしょう」

え、ちょ、ちょっと待ってよ。それじゃあ、僕は先生と離れ離れになっちゃうってこと。

先生と僕はずっと一緒にいたのに、そんなの、そんなのってないよ。

「ぼ、僕も一緒に行くよ！」

緊張に緊張を重ねた僕の口から飛び出た言葉は予想外なものだった。

「ロツシュ、いくらなんでもそれは」

お爺様は不安そうな表情でこちらを見てくる。

「お嬢ちゃん、さすがにそれは無理つてもんだ」

サムソンはサングラスを持ち上げて冷たく言い放った。

確かにそうだ、まだ14歳程度の僕なんかには魔王討伐なんて無理だし、それに危険すぎる。

でも。

「でも、先生はずっと僕が世話してあげてたんだよ。いくら先生が強いつて言っただって生活力なんて皆無なんだから。だから僕がいなきゃ旅に出てもどっかで倒れちゃうのがオチだよ。だから、だから……」

自分でも何を言ってるのか分からなかったけど、それでも先生とは離れたくなかった。

「わかりましたよ、ロツシュ」

先生が僕の肩にポンと手を置いた。

「村長さん、どうやら私はロツシュがいないとダメみたいです。ですから、またしばらくお預かりしたいのですが」

先生の一言にお爺様は顔を曇らせる。そうか、いくら先生がいいつて言っても村長が許可を出さないとダメなのか。

「ふむ、わかったよ」

ああ、もうこうなったら強行突破しか……つて、え、いいの？

「キファーノ君に任せれば大丈夫だろう。それに……」

お爺様は僕の頭をその大きな手でクシャクシャに撫でて、にっこりとほほ笑んだ。その手はどこか懐かしい感じがした。

「それにこの子は娘によく似ている。娘と同じように旅がこの子を成長させてくれるだろう」

「ありがとうございます、村長さん」

「いや、礼には及ばんよ。この子も君と一緒にいるのが一番だろうし。な、いいじゃろ？ サムソン君」

サムソンはやれやれと言わんばかりに重い腰を上げた。正直言つて、この蔵つい奴は好きになれない。

「仕方ありませんね。アロンソ・キファーノ氏と、ええと……お嬢

「ちゃん、名前は？」

「ロツシーナ・パサモントだよ」

僕の名前を聞くとサムソンは手元のカードにペンで何やら書いているようだった。

「よろしい。アロンソ・キファーノ氏とロツシーナ・パサモント氏、管制局の名の下に貴殿らを魔王討伐士に任命する」

そしてサムソンは僕と先生にさっきのカードを渡した。

「何なの、これ」

「任命証みたいなものだ。大事にしるよ」

皮で作られた素敵なカードには先生と僕の名前が書いてあった。「それにお前ら二人に世界の命運がかかっていると云ってもいいわけだ。後は頼んだぞ」

それだけ言つて、サムソンは部屋を後にした。お爺様もそれに続く。

夜は更けていき、空には少し陰りを見せる月が浮かんでいた。

\*

翌朝、空は見事に晴れていた。絶好の旅立ち日和だと言つても過言ではないだろう。

そう、僕たちは今日旅に出る。

朝も早いと言つのに村の大門の前には多くの人が見送りに来ていた。

お爺様に、建具屋の旦那と奥さん、それにいつものクソガキたち、その他諸々が集まってまるでお祭り騒ぎのようだった。

「ロツシュちゃん、身体には気をつけるんだよ」

「わかつてるよ、奥さん」

「てめえがいなくなったら俺たちが寂しい思いをするだろうが、口

ツシユウ」

「もう、旦那。そんな鼻水垂らしながら泣かないでよ。いつかきつと戻って来るからさ」

建具屋の旦那も奥さんも涙をぼろぼろ流している。旦那にいたっては鼻水でドロドロだ。

「ぜつたい、ぜつたい帰って来いよ。お前がいないと、俺もつまんねえからな」

「クソガキ……あんた」

「やっぱり、馬鹿な妹分でもないときさみしいって、ぐへっ！」

「馬鹿とは何だ、馬鹿とは！ それに僕の方があんたより年上だよ！」

クソガキの腹には僕の回転を効かせた拳がメリメリとめり込んでいった。一歳しか違わねえじゃん、という断末魔が聞こえたけどそんなの無視だよ、無視。

「キファーノ君、この世界を頼んだぞ。そして、ロツシユのことも」  
「もちろんですよ、村長さん。むしろ、僕の方がロツシユに助けられるかもしれないですしね、ね？」

先生はそう言って、僕に視線を向ける。だけど、僕はブンブンと首を横に振る。

先生がそんなことを言うのはあのとときの空中浮遊のことだろうか。あれは多分僕じゃないって。

「そうか。ロツシユ、キファーノ君を助けてやってくれ。頑張ってきて」

「うん。わかってるよ、お爺様」

僕は今にも泣き出しそうなお爺様に笑顔を返した。

さて、これで大体の人に挨拶はし終わったかな。

「あ」

その時、僕の視界に映った人物は意外な人物だった。まさか見送

りに来てくれるなんて思ってもみなかった。

さらさらの金髪に白い肌、青い瞳、そして漆黒のドレス。この人のことは忘れようとも忘れられない。

「ドルサナさん、どうしたんです」

「何よ、私が見送りにきたらいけないのかしら」

「い、いや、そんなわけじゃ」

ああ、今日もサナ嬢は虫の居所が悪いみたいだ。さすがに今日は喧嘩とかしたくないんだよな。

僕のそんな心配を他所にサナ嬢は勝手に話を始める。

「月花祭……結局、月花美人が決まらないまま終わってしまいましたわね」

「うん。でも、あんな騒ぎがあつたらしかたないんじゃないかな」

「そんなの納得いきませんわ！」

サナ嬢の怒鳴り声がビリビリと空気を震わせる。その蒼い瞳はまるで炎が灯ったようにゆらゆらと鮮やかに燃えている。

そしてそのまま、サナ嬢は僕の襟元をギュツと掴み上げた。あ、顔が近い。

「あ、あの……」

「いいですか、月花美人が決まらなかったということは私とあなたの勝負はまだ着いておりませんの」

「そ、そうですね」

「こんなに屈辱的なことはありませんわ。私はあなたの前に勝利の印を見せつけなければ気がすみません」

そう言うと、サナ嬢はやっと僕の襟を離してくれた。

「だから、ロツシュ。あなた、絶対この村に帰って来なさいよ」

「え」

「あなたが帰ってきたら勝負の続きを始めましょう」

サナ嬢はニコリと微笑んで、踵を返した。

「ぜったい、絶対帰ってくるよ、ドルサナさん！」

僕は彼女の背中にそんな返事を返した。心なしか彼女の歩調が早

くなった気がする。

ふと僕は集まった人たちをぐるりと見回してみた、だけどやっぱりあの人は来てないようだ。

サナ嬢が来たから、もしかしてと思ったんだけどやっぱり来てないよな。

「さて、ロツシュ。そろそろ行きますか」

「あ、うん。そうだね、行こうか」

僕は先生に促され、門の前に歩いて行った。村の大門は開かれて、僕たちは村のみんなの声を聞きながら外の世界に一步を踏み出した。みんなが手を振って僕たちを見送るから、僕もずっと手を振り続ける。

僕は本当にあのみんなの笑顔をもう一度見ることが出来るんだろうか、そんなことが頭をよぎる。

絶対帰るとはいつたけれど、この旅はそんなにやわなもんじゃない。むしろ危険なものに違いないだろう。

いくら先生がいるといつても魔王討伐だ、僕らの命が危険にさらされるのは明らかだ。

旅の始まりから、そんな暗いことを考えていると、僕の名前を呼ぶ声が聞こえた気がした。

振り返ると、もう遠くになってしまった大門の上の見張り台に誰かが立っていた。

「ハイネ、さん？」

見張り台の上にはハイネと、あと月花祭の司会をしてた、えーとパンサーさん？がいた。

ハイネさんは何か叫んでるみたいだったけど、さすがにこれだけ距離があると全然聞こえない。

すると、ハイネは傍らにいたパンサーさんを蹴飛ばしてパンサーさんの拡声器を奪い取った。そして、大声で叫んだ。

「ロツシュ！　いつかきつと戻って来い、お前の家はこの村だけだ！」

拡声器越しの声が僕の胸にすうっと染み込んでいった。

ああ、そうか悩むことなんてなかったね。僕は家に帰るために旅をすればいいんだ。

魔王を倒して、生きて家に帰る、それが僕の目的。それでいいんだ。

「ありがとう！　ハイネお兄ちゃん！」

僕はハイネに向かってそう叫んだ。聞こえるかどうか分からないけど、僕の声はちゃんと届いた気がする。

一瞬、ハイネが鼻血出して倒れたような気もするけど、気のせいでしょう。

「ロツシュ、ロツシュ。何ですか、あの“お兄ちゃん”って」

「何となくだよ、何となく！」

「もしかあのロリコン議員に……」

「んなわけないでしょ！　それよりもさ、先生」

「ん？　何ですか」

「いや、先生がお爺様を見たときって一瞬じゃあ村長っての分かんなかったみたいだけど何で僕るときはすぐわかったの？」

「ああ、それはですね。ロツシュの声が耳慣れてたって言うのもありますけど……」

少し言葉に詰まってるから、先生はこう答えた。

「ロツシュの姿があまりにも私のイメージ通りだったから、目の前のかわいい女の子を見てついロツシュって呼んでしまったんですね」

「ふーん、そうなんだ」

かわいい女の子？　僕がカワイイ？　かわいい、カワイイ、可愛い……。

「あれ、どうしたんですか顔を赤くして」

「あー、もう何でもないよ！」

今から過酷な旅が始まるってのに、先生はまったく緊張感が無いんだから。でも、かわいい、かあ……。

振りかえるとちょうど一陣の風が吹き抜けていった。

村の方を見ると風車がゆっくりと回っていた。

消失を免れた風車が一つだけ、あんなに色々なことがあったのに今まで通りにクルクルと回っている。

本当に色々なことがあったな。

月花祭の波乱を越え、荒れ狂う竜を倒して、村に、先生に、そして僕に再び平和な日常が訪れた。

だけど、今から新しい日常が始まる。

そんな変化を告げるように、また風が吹いた。

「されど風車は虚しく回る」「了」

## 最終話「僕と先生」（後書き）

この拙い連載作品もようやく終わりです。

今まで読んで下さった方には何とお礼を述べればいいかわかりません。

至らぬところも多く感じられたでしょうが、これからの反省材料にさせていただきます。

物語はここで終わりですが、ロッシュたちの旅は始まったばかりです。

冗談抜きで、どこかの作品でまた登場するかもしれませんが、そのときは温かく迎えてやって下さい。

それでは、またいつか何かの作品でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5628/>

---

されど風車は虚しく回る

2010年10月8日12時26分発行